

富山県 朝日町
柳田遺跡発掘調査報告書 II

2005年
朝日町教育委員会



序

美しい海の宝石翡翠が打ち上げられる宮崎・境海岸、背後に猛々しく聳え立つ北アルプス後立山連峰から流れ出る清流、海・山・川すべての自然に恵まれた朝日町。これらの風景は今も変わらず太古の昔より受け継がれた町の宝物です。

今回の調査区『柳田遺跡』は黒部川と小川が何千年もかけて作り上げた扇状地上に5,000年以上も前に栄えた縄文時代を代表する遺跡です。

平成14年度に行われた同遺跡の調査では、町の海岸で採集された蛇紋岩を用いて作られた球状耳飾や磨製石斧、これらを加工する砥石などが数多く発見され、遺跡内で盛んに石製品が加工されていたことが裏付けられました。縄文時代より柳田集落の人々は、自然と向き合い、この地に存在する美しい資源を探し当て、工夫を重ねながら有効に取り入れ生活していたことがわかります。

今回行った平成15年から17年にかけての調査においても、柳田遺跡の当時の繁栄を示す資料が数多く姿を現しました。

前回同様蛇紋岩を活かした石製品をはじめ、長野県和田峠産の黒曜石、岐阜県産の下呂石、東北産の頁石などが各調査区に出土しており、他地域との交流も活発に行われていたということが明確にわかります。また、出土した縄文前期の福浦上層式土器は、完形に近い形での出土は県内では例が少なく、今後調査・研究を重ねる上で資料的にも貴重な土器といえるでしょう。

おわりに、この調査ならびに報告書作成にあたりご協力を頂きました地元住民の方々及び富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成18年 3月

朝日町教育委員会
教育長 永口 義時

例 言

- 1 本書は富山県下新川郡朝日町大家庄柳田地内に存在する柳田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業に先立ち朝日町教育委員会が実施した。
調査費用は富山県が負担した。
- 3 調査事務局は朝日町教育委員会におき、調査事務の総括は財団法人朝日町文化・体育振興公社事務局長代理水島康彦が行った。
また、調査にあたり朝日町シルバー人材センター及び地元住民の方々の協力を得た。
- 4 調査期間 平成15年6月25日～平成17年8月30日
本調査 一次調査 平成15年6月25日～11月7日
平成16年3月12日～3月26日
二次調査 平成16年6月21日～8月20日
三次調査 平成17年7月5日～8月30日

調査面積 一次調査 440m²
二次調査 434m²
三次調査 554m²
- 5 発掘調査担当者は次のとおりである。
担当者 (財)朝日町文化・体育振興公社 事務局長代理 水島康彦
(財)朝日町文化・体育振興公社 文化財保護主事 島 瑞穂
- 6 資料の整理、本書の編集・執筆は文化財保護主事島瑞穂が行った。
また、調査期間中及び資料整理・本書の作成において次の方々からご指導助言をいただいた。記して敬意を表したい。
富山県埋蔵文化財センター 安念幹倫 齊藤隆 酒井重洋 高梨清志 山本正敏
- 7 本誌の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
(1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
(2) 遺構の表記は次の記号を用いた。
溝：S D 土坑：S K
(3) 挿図の縮尺は1/2・1/3・2/3とした。
(4) 写真図版の遺物の縮尺は1/2・1/3とした。
- 8 土色の色名については、1997年度後期版「新版 標準土色帖」・土色計S P A D - 503を使用した。
- 9 出土品及び記録資料等は、朝日町教育委員会の指示に基づき朝日町文化・体育振興公社が保管している。

本文・目次

序文	4 遺構
例言・目次	第一次調査(平成15年度)… 9
I 位置と環境…………… 1	第二次調査(平成16年度) ……………13~14
II 調査に至る経緯………… 2	第三次調査(平成17年度)…17
III 調査の概要	5 遺物
1 調査の方法…………… 3	土器編……………18
2 地形・立地…………… 3	石器編……………19
3 基本層序…………… 4 ~ 5	IV まとめ……………28~29
	参考文献……………44
	報告書抄録……………45

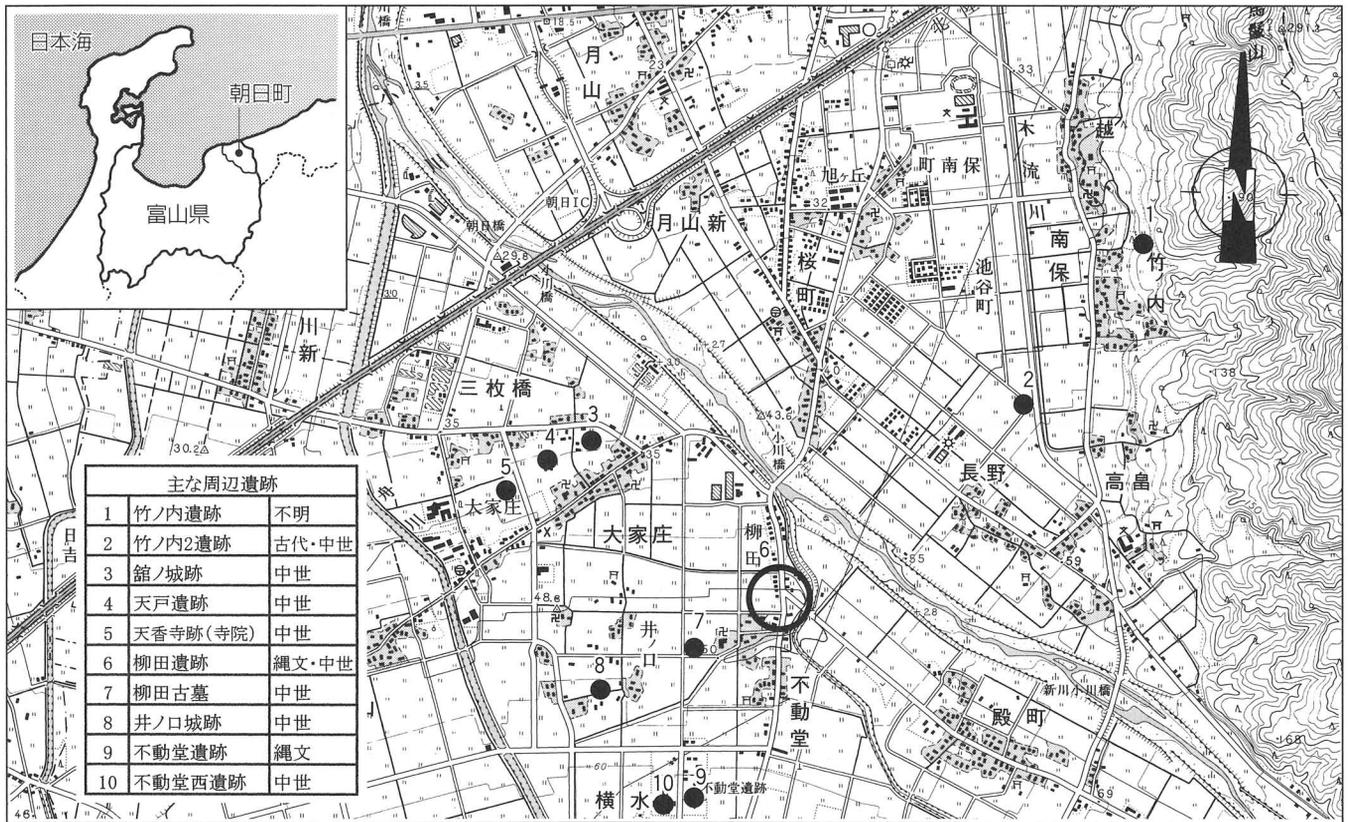
挿図・図版・表 目次

第1図 遺跡の位置と周辺の地形 …………… 1
第2図 柳田遺跡調査区位置図 …………… 2
第3図 柳田遺跡過去調査区位置図 …………… 2
第4図 第一次調査(平成15年度)調査区全体図 …… 6
第5図・6図 第一次調査 遺構平面・土層図 …… 7~8
第7図 第二次調査(平成16年度)調査区全体図 ……10
第8図 第二次調査 遺構平面・土層図 ……………11
第9図 第二次調査 縄文土器出土状況 ……………12
第10図 第三次調査(平成17年度)調査区全体図 ……15
第11図 第三次調査 遺構平面・土層図 ……………16
第12図~第16図 遺物実測図 ……………22~27
表1 主な周辺遺跡 …………… 1
表2 柳田遺跡出土石製品属性表 ……………20~21

写真 目次

調査区全景……………30~32	遺物写真(土器類)……………38~41
各調査区遺構写真……………33~37	遺物写真(石器類)……………42~43

I 位置と環境



第1図 遺跡の位置と周辺の地形
(S = 1/25,000)

第1節 地理的環境

朝日町は富山県の東端新潟県との県境に位置し、今回の柳田遺跡は富山県朝日町大家庄柳田地区に存在する。町内は二級河川小川を挟み、北東側が小川の扇状地、南西側が一級河川黒部川の旧扇状地によって形成されている。

柳田遺跡は全体で約3.9haの拡がりが確認されている。調査地の標高は約48mで、小川と黒部川の新旧扇状地の東北端部分、ちょうど接点にあたり、さらに小河川が扇状地内を流れるためわずかな起伏が見られ、当遺跡も小川支流の山合川左岸の微高地に位置している。

第2節 歴史的環境

この柳田地区は、田畑作業の際土中から多くの遺物が見つかっており、古くより一帯が遺跡であることが確認されていた。

昭和49年の圃場整備に先立つ調査では、縄文前期の竪穴式住居跡、前期から晩期・中世の遺物が確認された。近年報告書が発行された調査では平成14年度の本調査において、縄文時代前期の遺物が発見されている。特徴的な出土遺物としては、玦状耳飾（矩形・楕円形 すべて欠損品）が12点出土している。石鏃も多数出土しており、材質は黒曜石をはじめ、ハリ質安山岩、頁岩、鉄石英などが確認されており、各地域との流通や交流の一端がうかがえる。

黒部川旧扇状地帯は、多くの縄文遺跡（前期～晩期）が存在することで知られている。代表的なものでは、国史跡「不動堂遺跡」「下山新遺跡」「愛本新遺跡」「風野遺跡」「坪野遺跡」などがあげられる。

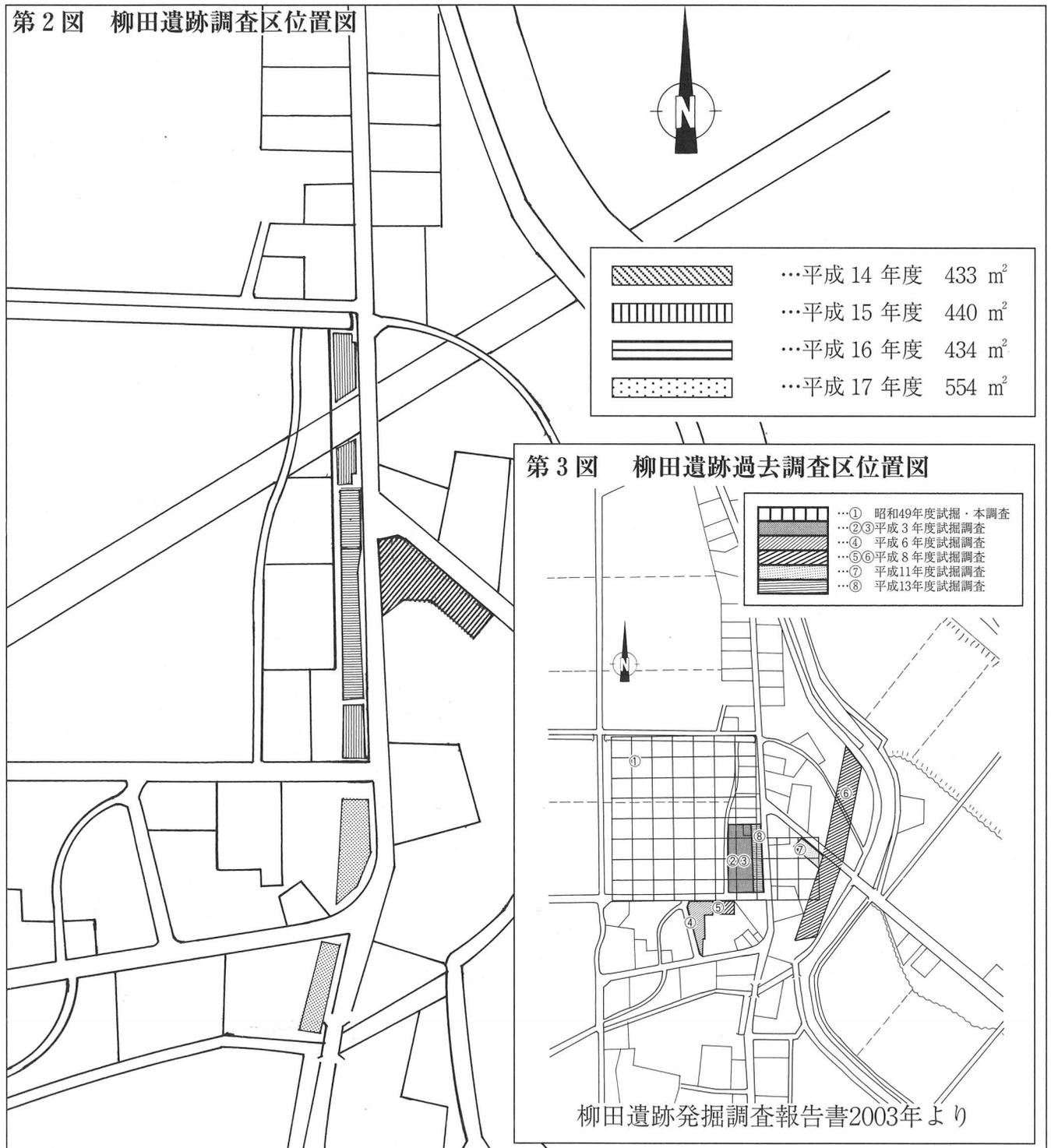
また、中世においても「柳田中世古墓」をはじめ、14年度調査時に同柳田遺跡内において珠洲の双耳壺がほぼ完形で発見されており、この時代の繁栄を裏付けている。

Ⅱ 調査に至る経緯

平成11年度に、富山県入善土木事務所において、主要地方道朝日宇奈月線地方特定道路改良事業が実施されることとなった。この拡幅予定地が埋蔵文化財包蔵地である柳田遺跡の範囲内に当たるため、富山県教育委員会文化財課と朝日町教育委員会の協議の結果、平成11年12月に事前調査として試掘調査を行った。

試掘調査の結果、遺構・遺物の出土状況などから、道路拡幅予定地に遺跡の範囲が拡がりを見せていることが確認された。

従って、平成14年5月より、道路拡幅予定地の本調査（富山県朝日町 柳田遺跡発掘調査報告書2003年 朝日町教育委員会参照）に始まり、平成15年6月、平成16年3月、平成16年6月、平成17年7月と続けて本調査を行った。（第2図参照）



Ⅲ 調査の概要

1 調査の方法

i 第一次調査（平成15年度）

道路・民家・店舗の営業に支障が出る可能性があったため、調査区を3区に分けて調査を行なった。（AY-II①中 ②南北 ③と表記）なお、表記に関しては、AY-II③地区のみが飛び地のため、分けて図化した。

ii 第二次調査（平成16年度）

民家・店舗の営業に支障が出る可能性があったため、調査区を3区に分けて調査を行なった。（AY-II ④と表記）

iii 第三次調査（平成17年度）

調査区の中央に生活道が存在したため2地区に分け調査を行った。（AY-II⑥と表記）

調査法は、3地区とも共通の方法で行った。調査区上の建物の撤去後、バックホウにて表土・耕作土の除去を行い、10mごとの基本杭を設置し、その杭に基づき2m×2mのグリッドを設け、それを基準とした。基本杭は国家座標に基づいて基点を設定し、座標軸は南北をX軸、東西をY軸に設定した。調査は、表土除去後は人力による掘削作業を行い、遺構・遺物・土層等の確認をし、後日整理作業を行なった。

2 地形・立地

柳田遺跡は、朝日町大家庄柳田地区に存在する。2級河川小川の支流にあたる山合川左岸標高約48mの微高地に位置する。前回平成14年度の調査区（今回調査区東側）においては、縄文前期の縄文土器・石器に加えて球状耳飾などが出土しており、これらの時代風景を解明する上で貴重な資料となっている。

ただ、前回調査区に比べて、今回調査区（第一次・二次・三次共通）に関しては、道路や建築物・水路等を建設する際の基礎工事により、かなりの層まで掘り込まれ、遺構の大部分が削平・損傷を受けており、遺構の残存状況は良好とはいえない状態であった。



萱が敷きつめられた状態



木製水路

AY-II⑥地区にて、縄文時代の遺構と同標高で確認された近世から現代にかけての農業遺構

3 基本層序

i 第一次調査（平成15年度）

3地区とも碎石・表土を除き、3～4層確認できた。各地区とも遺物包含層は黒褐色粘質土で共通している。

中区（AY-II①）…南北セクション西壁を測る。碎石層は約10cm、1層から3層（地山）までは約1mを測る。碎石を除き、3層確認された。1層は盛土で、攪乱等も見受けられるが、2層の遺物包含層・漸移層に関しては、比較的良好な状態で確認された。

北区（AY-II②）…南北セクション西壁を測る。碎石層は約20cm、1層から3層（地山）までは約90cmである。一部碎石が遺物包含層を破壊しており、攪乱・削平により包含層が消滅している。

南区（AY-II②）…南北セクション西壁を測る。1層から3層（地山）までは約60cm。2層遺物包含層までの標高が約20cmと浅い。また、遺物包含層が中央部分にしか存在しておらず、遺構は確認されたが、上部に関しては、盛土の際、削平された可能性が高い。

AY-II③（調査区が飛び地のため、別途記入することとした）

碎石層を除き、4層確認できた。碎石層は約20cm、1層から3層（地山）までは約80cmである。層序自体は、均一に確認できたが、南側は建物等の建設により攪乱されている。

調査区名	AY-II①	AY-II②	AY-II②
	中区	北区	南区
標高	48.6～49.6m	48.5～49.4m	48.9～49.8m
基本層序 土層色（碎石・表土除く）			
1層	10Y R4/2 褐灰色粘質土	10Y R4/2 褐灰色粘質土	10Y R4/2 褐灰色粘質土
2'層 (遺物包含層)	10Y R3/2 黒褐色粘質土	10Y R3/2 黒褐色粘質土	10Y R3/2 黒褐色粘質土
2層 (遺物包含層)	10Y R2/2 黒褐色粘質土	10Y R2/2 黒褐色粘質土	10Y R2/2 黒褐色粘質土
3'層 (地山漸移層)	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土
3層（地山）	10Y R6/3 にぶい黄褐色粘質土	10Y R6/3 にぶい黄褐色粘質土	10Y R6/3 にぶい黄褐色粘質土

調査区名	AY-II③
標高	48.0～48.8m
基本層序 土層色 (碎石・表土除く)	
1層 (遺物包含層)	10Y R2/2 黒褐色粘質土
2層 (遺物包含層)	10Y R3/2 黒褐色粘質土
3'層 (地山漸移層)	10Y R4/2 灰黄褐色粘質土
3層（地山）	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土

ii 第二次調査（平成16年度）

3地区とも碎石・表土を除き、2～3層確認できた。各地区とも遺物包含層は黒褐色粘質土で共通している。

北区（AY-II④）…南北セクション東壁を測る。碎石層・表土は約40cm、1層から地山までは約60cmを測る。表土を除き3層確認された。工事等の攪乱によりかなりの損傷を受けている。

中区（AY-II④）…南北セクション東壁を測る。碎石層・表土を含めて約40cmを測る。1層から地山までは約60cmである。一部建築物による攪乱が確認されており、遺構への影響が懸念される。

南区（AY-II④）…南北セクション東壁を測る。碎石層・表土は約40cm、1層から地山までは約30cmである。碎石を除き2層確認された。礫層の下に不織布が混入している。過去の試掘等掘削作業の際、敷かれたものと推測される。遺構の大半は、2層下で検出した。この区は遺物包含層の大半が削平されており、遺構面（地山）に食いこむ面が多少残るのみである。

調査区名	北区	中区	南区
標高	46.9～48.1m	47.8～48.8m	47.3～49.7m
基本層序 土層色（碎石・表土除く）			
1層	10Y R4/2 褐灰色粘質土	10Y R4/2 黒褐色粘質土	10Y R4/1 褐灰色粘質土
2層 （遺物包含層）	10Y R3/2 黒褐色粘質土	10Y R3/2 黒褐色粘質土	10Y R3/2 黒褐色粘質土
2'層 （2層漸移層）	10Y R3/3 暗褐色粘質土	10Y R3/3 暗褐色粘質土	
3層（地山）	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土	10Y R5/4 にぶい黄褐色粘質土

iii 第三次調査（平成17年度）

両調査区とも、盛土・耕作土を除き、基本的に2層確認できた。

北区（AY-II⑥）…南北セクション東壁を測る。盛土は約1m、包含層から地山までは約80cmである。確定できる縄文遺構は確認できなかったが中世の土坑・石組が2層で確認された。遺物は主に1層・2層より検出されたが、耕作土・1層においては他所より土を移送した可能性も考えられる。調査区南側は旧河川跡と考えられる。

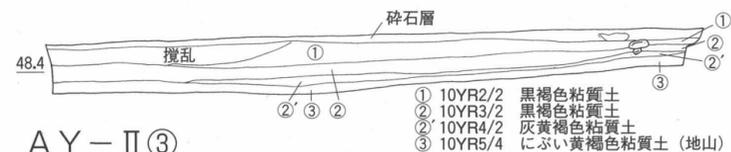
南区（AY-II⑥）…南北セクション東壁を測る。碎石層から旧盛土までは約1～2m、遺物包含層から地山までは約50cmである。調査区全体の南端にあたるが、かなり深く落ち込んでいる。

調査区北側において縄文時代と推定される貯蔵穴に栃の実が埋められた状態で検出された。ただ、同標高において、近代・近世と推定される水路・杭が確認されており、遺構の保存状態は極めて悪い状態であった。南側は湧水しており、旧河川であった可能性が高い。この河川の底面から土師質土器が数点出土している。中世の遺構も絡んでいる可能性は考えられるが、長期間水底に浸かっていたとは考えにくく、近辺から流出してきた可能性も伺える。南区は全体的に水が湧き出ており、地盤が大変緩くなっている。

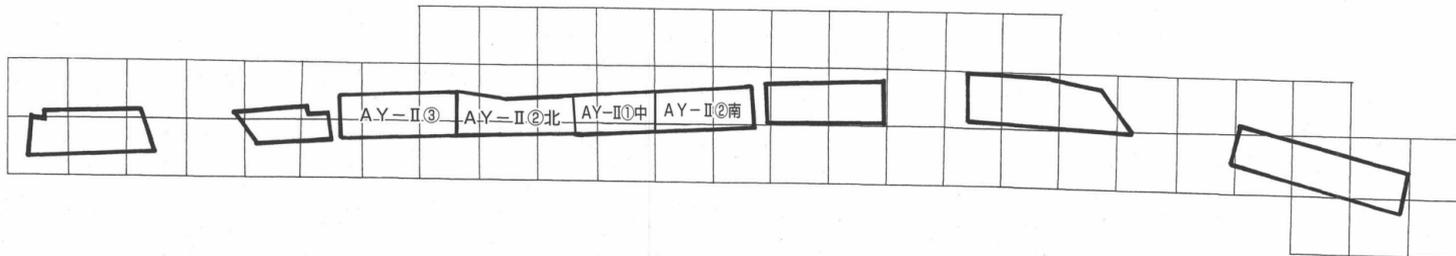
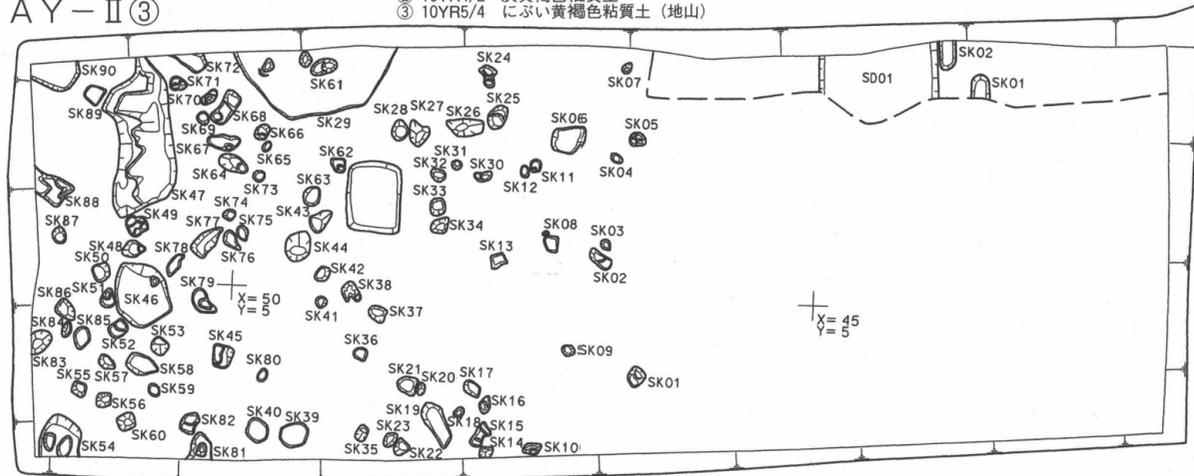
調査区名	北区	南区
標高	49.0～50.2m	47.6～50.2m
基本層序 土層色（碎石・表土・盛土除く）		
1層 （旧盛土）	10Y R3/1 黒褐色粘質土	10Y R3/1 黒褐色粘質土
2層 （遺物包含層）	削平・盛土により 消滅か	10Y R3/1 黒褐色粘質土
2'層 （2層漸移層）	10Y R2/2 黒褐色粘質土	10Y R2/1 黒色粘質土
3層（地山）	10Y R4/3 にぶい黄褐色砂質土	2.5Y R4/2 灰赤色砂質土

AY-II①中②北・南③

AY-II③ 東壁セクション



AY-II③



AY-II②北 東壁セクション

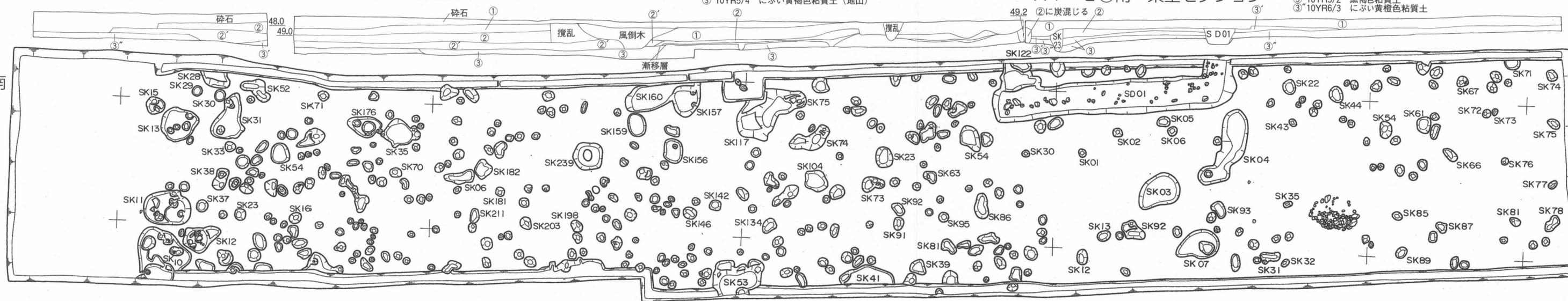
AY-II①中 東壁セクション

AY-II②南 東壁セクション

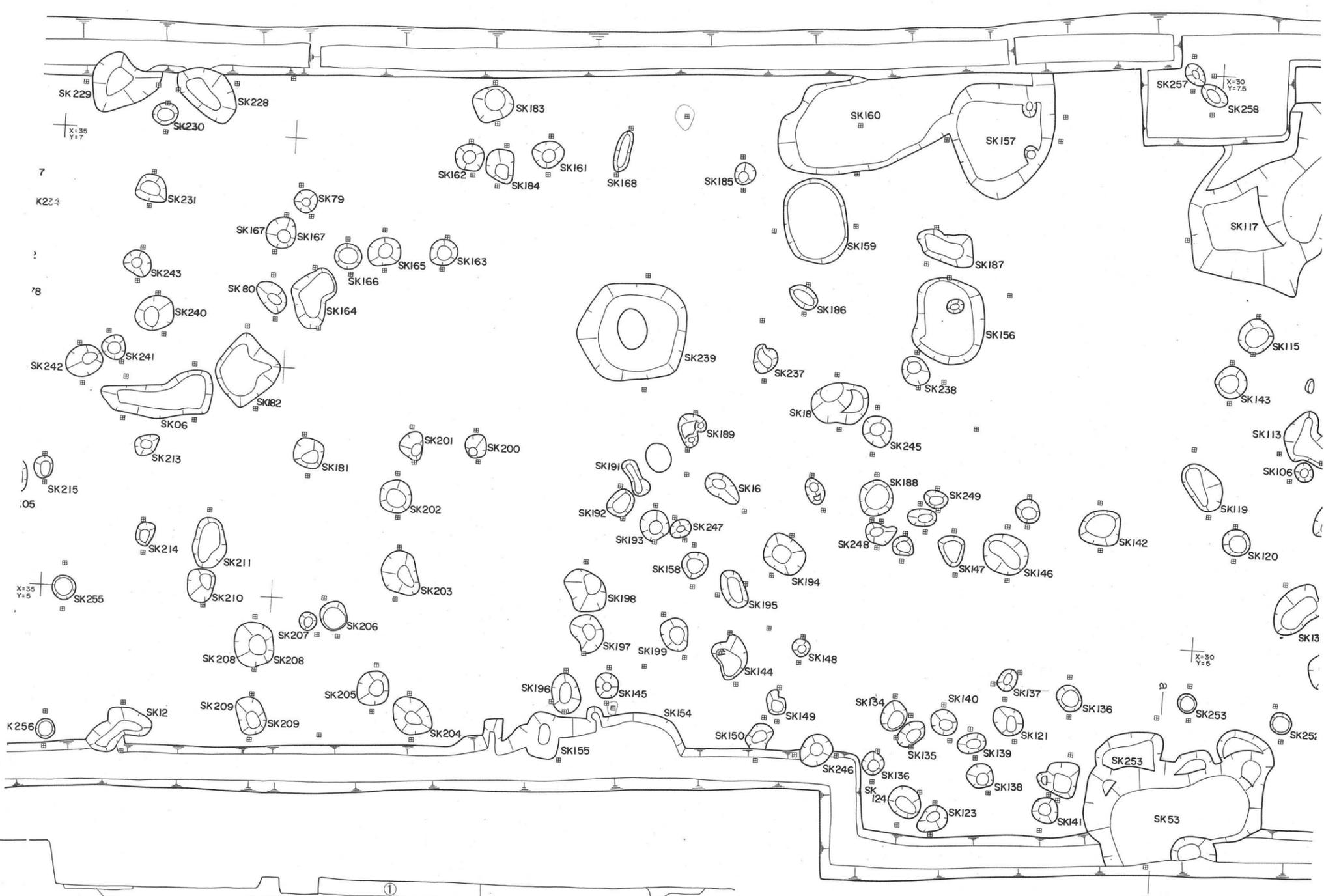
- ① 10YR4/2 褐黄灰色粘質土
- ② 10YR2/2 黒褐色粘質土
- ③ 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ④ 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 (地山)

- ① 10YR4/1 褐灰色粘質土
- ② 10YR2/2 黒褐色粘質土
- ③ 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
- ④ 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ⑤ 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土

AY-II
②北①中②南



第4図 平成15年度調査区全体図 (第一次調査)



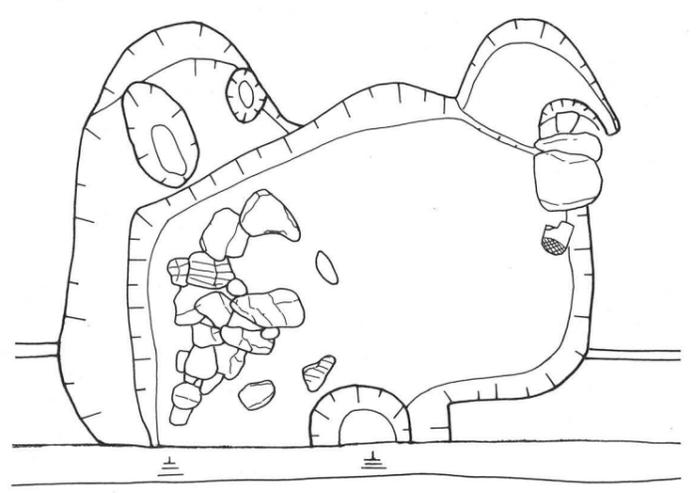
48.7N S 49.0N S

SK 160
 ①10YR3/2+10YR4/3
 黒褐色粘質土ににぶい
 黄褐色粘質土が斑点状に混じる

SK 157
 ①10YR3/3
 暗褐色粘質土
 ②7.5YR4/3
 褐色粘質土

住居跡
 ①10YR3/2
 黒褐色粘質土

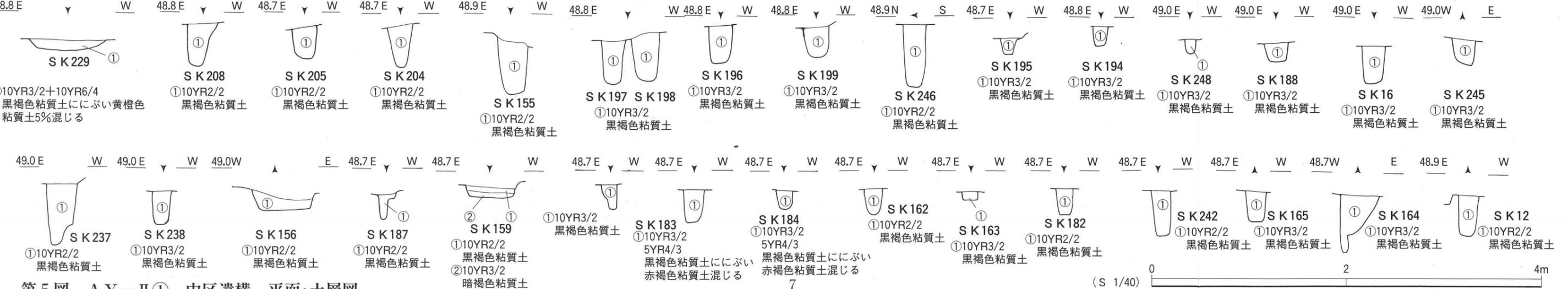
SK 53土器出土状況



a 49.2 E W a'

SK 53
 ①10YR2/2
 黒褐色粘質土(炭混じる)
 ②10YR2/2に10YR4/2
 黒褐色粘質土に黄褐色粘質土混じる

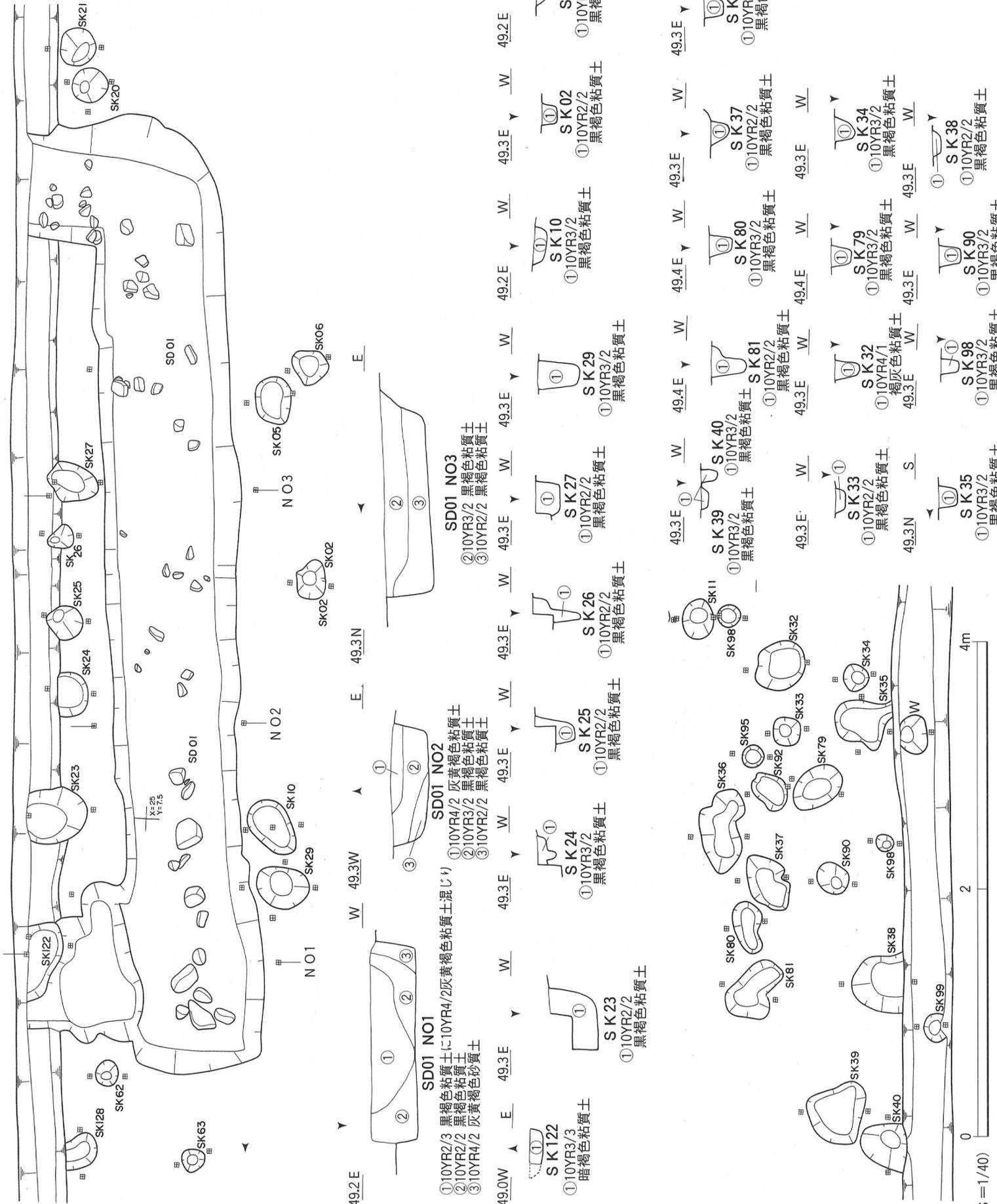
住居跡 ①10YR3/2
 黒褐色粘質土
 ②10YR5/4
 にぶい黄褐色粘質土



第5図 AY-II① 中区遺構 平面・土層図

(S 1/40)





第6図 AY-II①中区
AY-II②南区 遺構平面・土層図

SD01 NO1
①10YR2/3 黑褐色粘質土に10YR4/2灰黄褐色粘質土混じり
②10YR2/2 黑褐色粘質土
③10YR4/2 灰黄褐色粘質土

SD01 NO2
①10YR4/2 灰黄褐色粘質土
②10YR3/2 黑褐色粘質土
③10YR2/2 黑褐色粘質土

SD01 NO3
②10YR3/2 黑褐色粘質土
③10YR2/2 黑褐色粘質土

SK122
①10YR3/3 暗褐色粘質土

SK23
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK24
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK25
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK26
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK27
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK29
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK10
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK02
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK05
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK06
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK23
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK24
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK25
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK26
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK27
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK29
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK10
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK02
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK05
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK06
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK39
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK40
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK37
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK36
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK33
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK32
①10YR4/1 褐灰色粘質土

SK79
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK34
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK36
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK95
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK99
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK98
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK90
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK35
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK98
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK90
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK38
①10YR2/2 黑褐色粘質土

SK34
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK36
①10YR3/2 黑褐色粘質土

SK95
①10YR3/2 黑褐色粘質土

(S=1/40)

4 遺構

第一次調査（平成15年度）

A Y - II ①②

全体で溝1条、土坑239基の遺構が確認された。調査区中央部に集中しており、北側一部と南側一部に関しては、建造物等の建設の際に削平された可能性が高い。

住居跡

調査区中央部北寄 X32-34 Y4-6 地区に位置する。規模は約3.5m×4m、形状は不整長円形で、炉跡 S K239を中心に、なだらかに落ち込んでいるが、はっきりとした周壁は確認できない。中心部が焼けた地床炉が確認されたが、石組や敷石はない。柱穴と推測される土坑が周囲に不規則に並ぶ。深さは包含層上部から約20cmから40cm掘り込まれている。床面は貼床式である。

この住居跡上層からの出土遺物は、大量の縄文土器をはじめ、石器類も多く確認された。ハリ質安山岩製・黒曜石製の凹基無茎石鏃（完形品）をはじめ、欠損品、大量の黒曜石剥片、蛇紋岩製の玦状耳飾（欠損品）、多数の蛇紋岩原石、剥片、滑石・紅玉の石製品未成品などが出土した。何らかの形で住居内において、製作作業が行なわれていたことが伺える。また、栗などの炭化物も覆土中から確認されている。出土遺物から推測して、この住居跡の推定年代は縄文前期末と考えられる。

S K239

住居跡に伴う炉跡と推定される。住居跡ほぼ中心部に位置し、規模は短軸約80cm長軸1m、深さは約10cmと浅い。石組等は形成されていないが中央部に焼土が確認された。下部に土器などは轆かかれていない。

S K33

調査区中央部西側に位置する。直径約20cm×20cm、深さ約20cmを測る小型の土坑である。周囲に関連する遺構は確認できないが、土坑内から滑石製の玦状耳飾未製品が出土した。

S K53

調査区西側に位置し、調査区外に拡がりを見せる可能性がある。直径約1.6m×1.1m、深さ約50cmの方形の土坑である。土坑内南側からは底部にのみ縄文が施された小鉢型土器が破損した状態で出土した。その他、蛇紋岩石製品1点、石匙2点、黒曜石剥片8点が出土している。

S K122

調査区中央東側、S D01上部に位置する。長軸約60cm短軸40cm、深さ約10cmの小型の土坑である。土坑内で、北から頁岩、黄玉、蛇紋岩、玉髓の順で4種類の加工石が一行に並んだ状態で出土した。何らかの意図が感じられるが用途は不明である。

S D01

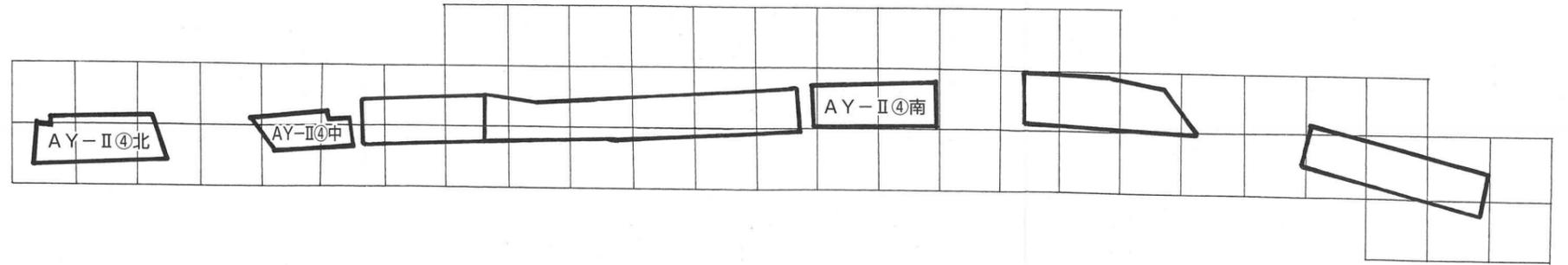
調査区中央東側に位置し、南北に約7m延び、両端とも直角に東側に延びる。調査区外に延びているため、全体の規模は不明。溝の幅は約1m、深さは約40cmを測る。方形を模っていると考えられるが時代・用途は不明。蛇紋岩原石2点が出土した。平成14年度柳田遺跡発掘調査においても南北に伸びる中世の溝を確認している。

また、S D01を挟む形で、東側にS K122を初め、S K23、24、25、26、27、西側にS K29、10、02、05、06と、深さに違いがあるが、（約10cm～40cm）大きさがほぼ同一（直系約30cm）の土坑が並んだ状態で確認された。S D01との関連が考えられるが、土坑の並びが不規則であるため、関連遺構、柱穴等の可能性はあるが断言できない。

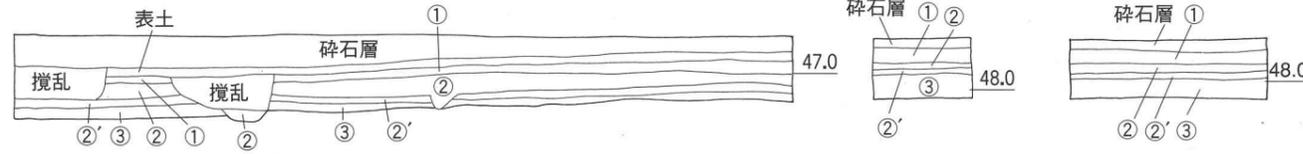
A Y - II ③

調査区南側半分は、住宅建設時における攪乱の影響を受けており、包含層がほとんど削平されている。溝1条土坑89基が確認されたが、明確な柱穴等の並びは確認できなかった。

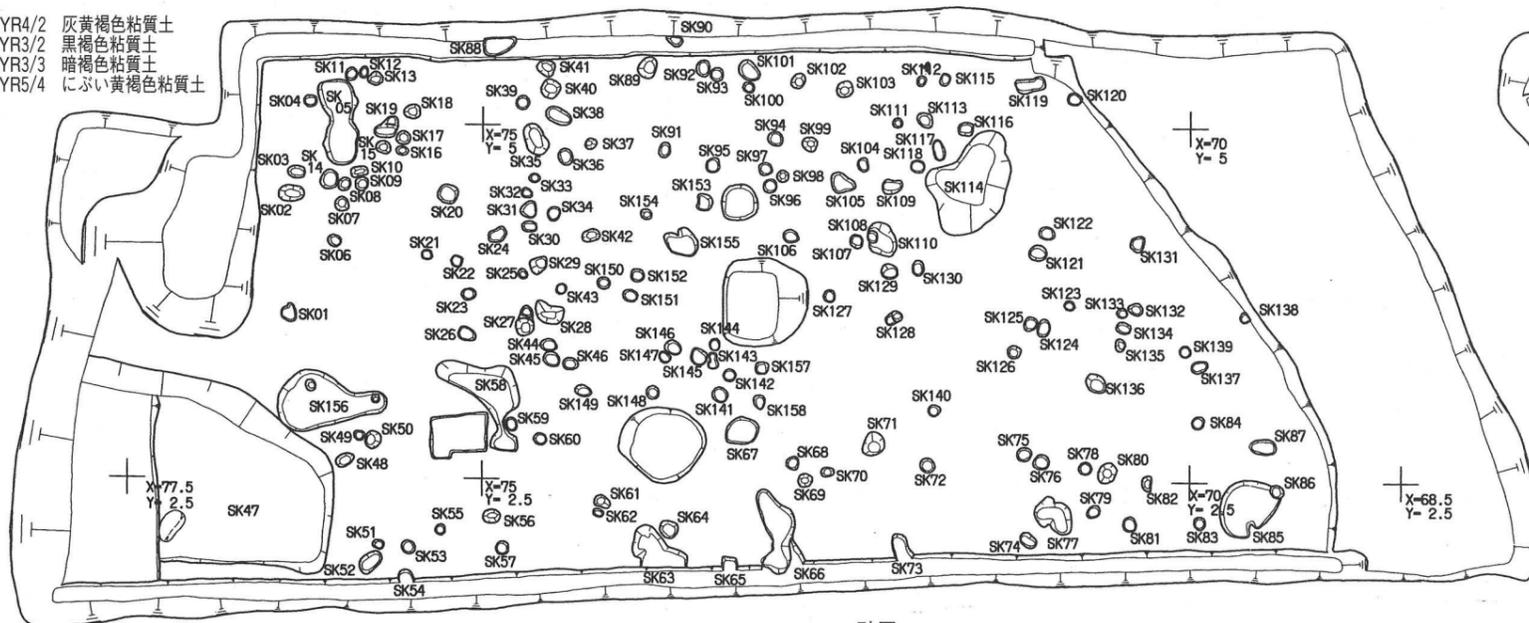
AY-II④北・中・南



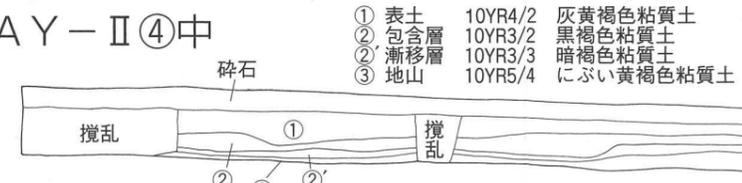
AY-II④北 東壁セクション



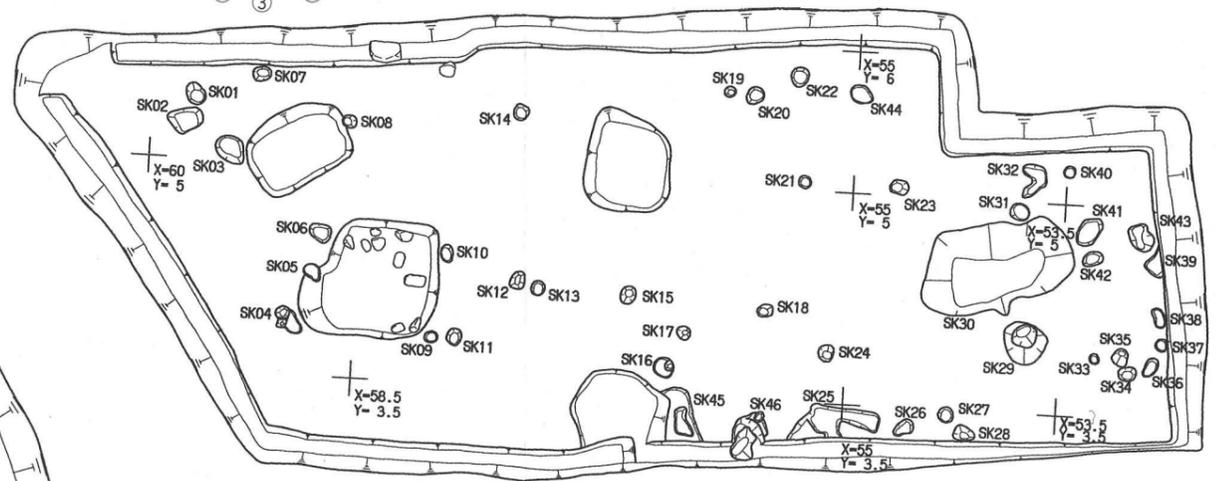
- ① 表土 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- ② 包含層 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ②' 漸移層 10YR3/3 暗褐色粘質土
- ③ 地山 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土



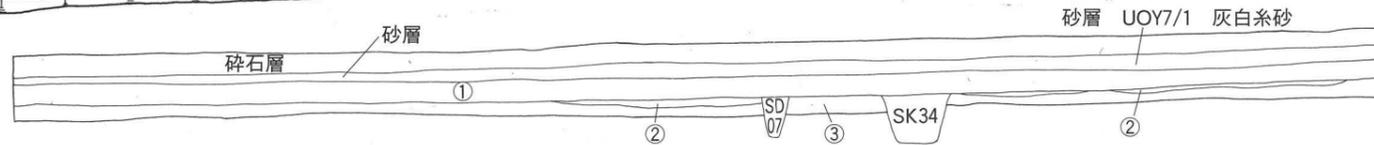
AY-II④中



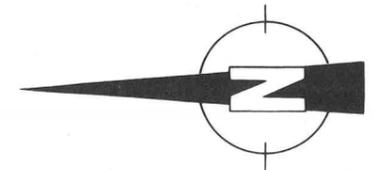
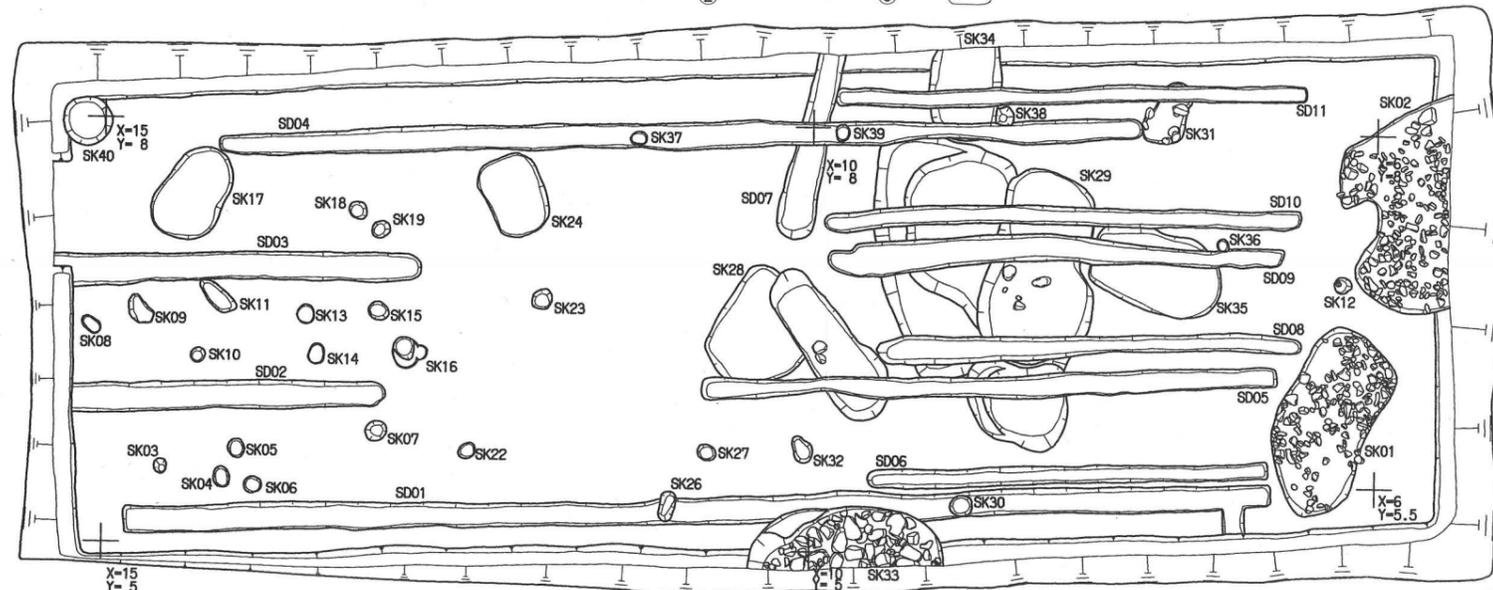
- ① 表土 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
- ② 包含層 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ②' 漸移層 10YR3/3 暗褐色粘質土
- ③ 地山 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土



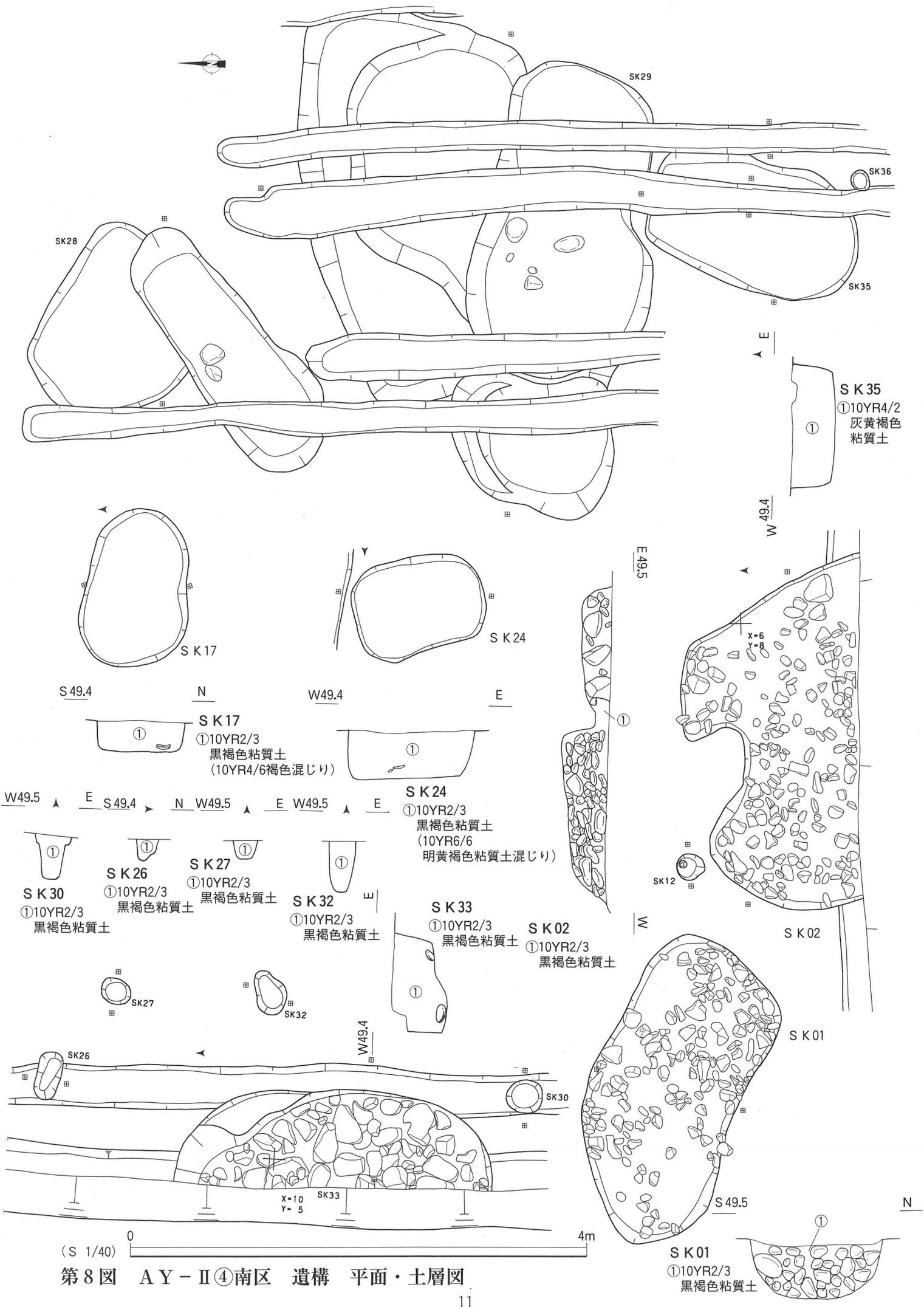
AY-II④南 東壁セクション



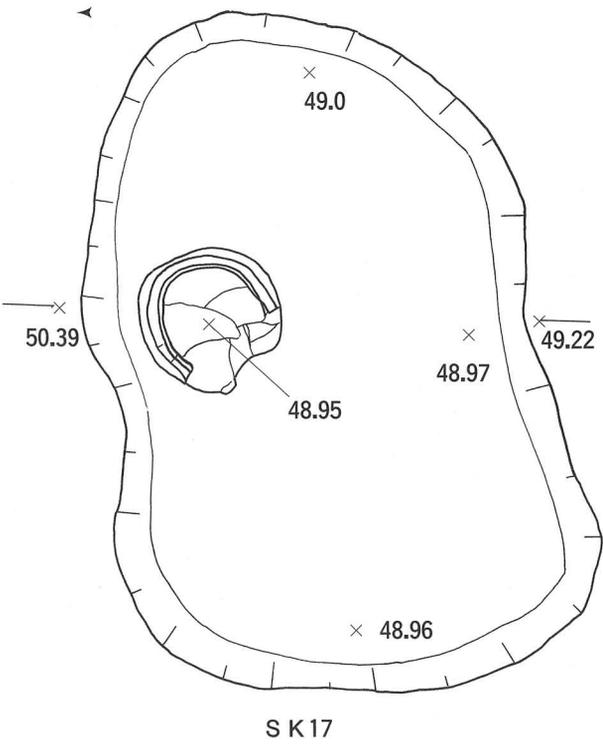
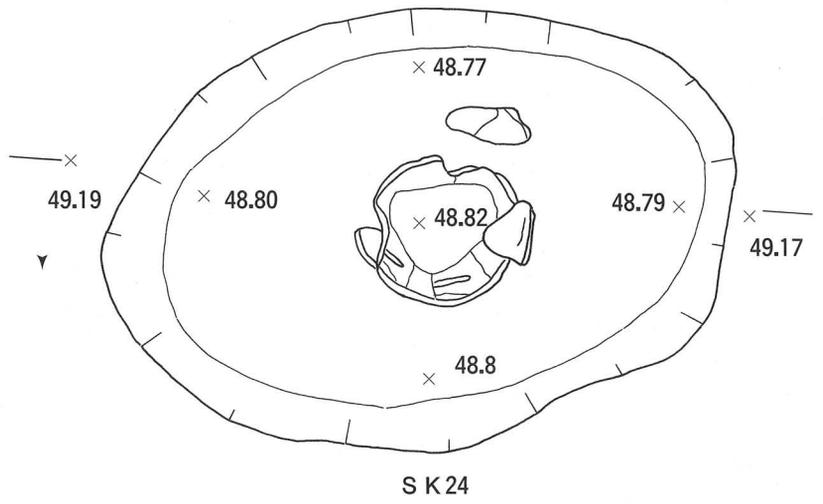
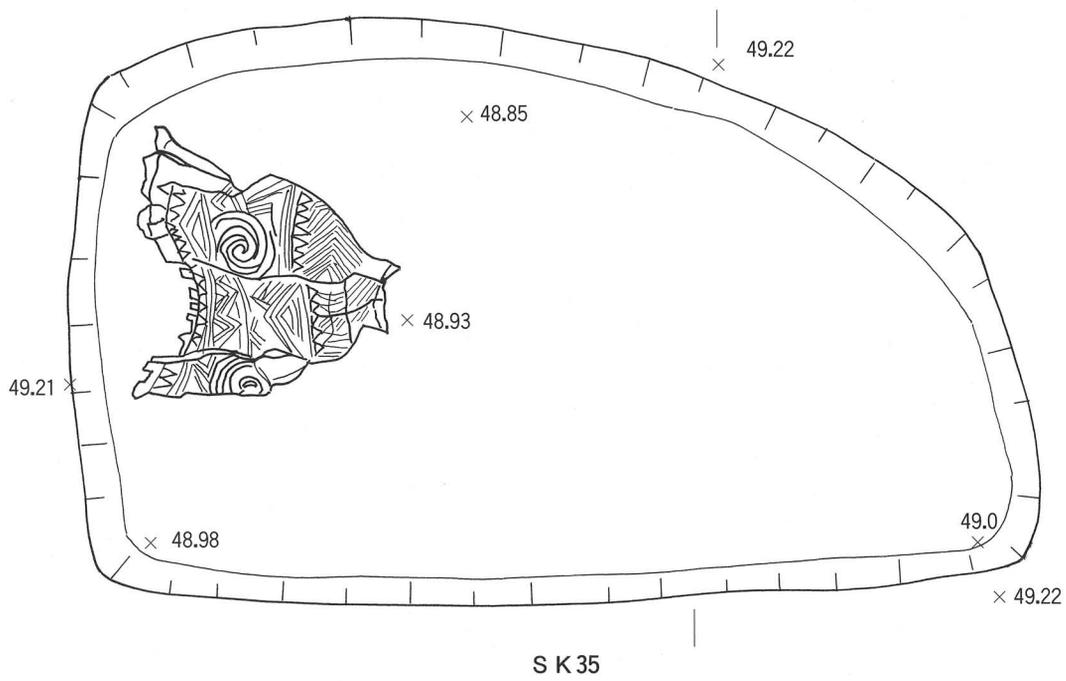
- ① 表土 10YR4/1 褐灰色土
- ② 包含層 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ③ 地山 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土



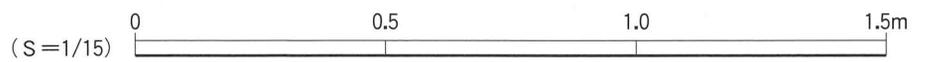
第7図 平成16年度調査区全体図 (第2次調査)



第8図 AY-II④南区 遺構 平面・土層図



※数字は標高



第9図 AY-II④南区 縄文土器出土状況

第二次調査（平成16年度）

i AY-II④（北）

全体で土坑158基を検出した。調査区南側は工事等により攪乱され、遺構は確認できなかった。また、北側においては、遺構が確認できたものの、隣り合う河川から水が入り込み、作業を断念した箇所があるが、中央部分に関しては遺構群は比較的良好な状態であった。ただし、小規模な土坑は数多く確認されたが、配列を成す遺構等は確認されなかった。

X77Y 2 付近は上記のとおり浸水により遺構発掘を中断したため、遺構番号は設定しなかったが状況からSKと考えられる。滑石製の楕円形球状耳飾が出土した。主な出土遺物は以下のとおりである。

X77Y 2 包含層中（2層）より、滑石製の楕円形球状耳飾状耳飾（欠損品）

X68Y 2 包含層中（1層）より、円形の石製装飾品。

X72Y 4 包含層中（1層）より、用途不明の車輪式石製品。

ii AY-II④（中）

全体で土坑46基を検出した。住居建設工事時にできた穴が4箇所も確認され、極めて遺構・遺物の保存状態は悪いものと考えられる。

特殊な土坑の配列などはないが、各地点において以下のような遺物が出土した。

X55Y 4 包含層中（1層）に玉髓製の凹基無茎石鏃。

X54Y 5 包含層中（2層）に蛇紋岩製石製装飾品。

X57Y 3 包含層中（2層）に鉄石英製の石匙。

X56Y 4 包含層中（1層）に翡翠原石。

X59Y 4 包含層中（1層）に瑪瑙原石。

大半が調査区の中央部に集中して出土しており、工具類は確認できなかったが、砥石や原石も含まれることから、この調査区周辺で生活が営まれていた可能性は十分に考えられる。しかし住宅工事等の攪乱により、遺構が削平され、消滅した可能性が非常に高い。

iii AY-II④（南）

全体で土坑40基、溝11条を検出した。現在生活面から遺構面が約40-60cmと非常に浅く、調査区全体に現代のものと考えられる溝跡（調査区に以前形成されていた畑で用いた重機跡か）が遺構上部に切り込む形で検出されたため、生活面に関してはかなり削平されているものと考えられる。ただし、完形で出土した土器などは遺構上層面から深く掘り込まれていたため、土坑内から出土した遺物に関しては保存状態は良好であった。同調査区は遺物の混入状況からみてほとんどが縄文時代の遺構と考えられる。

SK01・SK02

調査区南側X6-8Y5-8に位置する。SK01は長軸約2.5m、短軸1.5m、深さ約60cmである。SK02は短軸約3.2m、長径は調査区外道路下に拡がりを見せている。深さは約5cmを測る。2基とも集石遺構である。

多量の礫に混ざり、磨製石斧、石斧未製品、砥石、翡翠原石などが数十点出土した。縄文時代の作業場もしくは廃棄坑とも推測できる。しかし、現在の生活面から遺構上面までの深さが極端に浅いこと、近年まで同場所で農作物を栽培しており、遺構上面にも現代のものと考えられる数基の溝が確認されていることなどから考えて、畑を形成した際に不要な石を集めて一ヶ所にまとめて廃棄した可能性もあり、遺構自体の時代の特定は難しい。

S K17

X 7 - 8 Y 14 - 15に位置する。長軸1.6m、短軸 1 m、深さ約25cmの楕円形である。土坑内からはほぼ完形で復元可能な縄文前期末葉の浅鉢が口縁部を上にした状態で出土した。土器に対して土坑がかなり大きく掘り込まれている。土器には朱塗りが施されており、祭事に利用された可能性が伺える。

S K24

X 11 - 12 Y 7 - 8に位置する。長軸1.2m、短軸 1 m、深さ約40cmの楕円形である。S K17と同様土坑自体は土器に対してかなりの大きさを呈している。土坑内からは完形で復元可能な縄文時代前期末葉の浅鉢状の土器がS K17と同様口縁部を上にした状態で出土した。口縁部内側4点に滑り止めと推測される装飾が施されており、浅鉢の蓋として使用されていた可能性が考えられる。

S K28

調査区中央部X 10 Y 6に位置する。S K33の東側に位置する。長軸約1.6m、短軸約1.2m、深さ約40cmを測る。中央部に広がる遺構で、大量の土器などの出土はないが、石製装飾品1点と翡翠原石が土坑中から出土した。

S K29

調査区中央部X 8 Y 6 - 9に位置する。長軸約 4 m、短軸約1.5m深さ約30cmの土坑である。S K35の北側に位置する。頁岩製の凹基無茎石鏃（完形品）が検出された。

S K33

調査区西側X 9 - 11 Y 5 - 6に位置する。短軸60cm、長軸は調査区外西側に拡がりを見せる。深さは約43cmと深く、S K01、S K02よりも全体的に大きめの礫が敷かれている。遺構内からは黒曜石製の凹基無茎石鏃（完形品）が出土した。

S K35

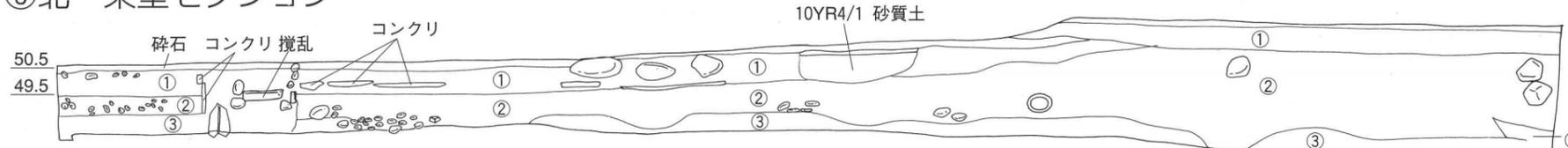
X 5 - 7 Y 5 - 7に位置する。長軸1.8m、短軸1.2m、深さ約40cmの半円形である。土坑内からはつぶれた状態ではあるが、ほぼ完形で復元可能な縄文時代前期末葉の深鉢（福浦上層式）が出土した。倒れて横になった状態で出土しており、埋設された当初は埋甕として利用されたとは考えにくい。

S K17、S K24、S K35とも遺構の大きさに違いはあるが土器事体の直径よりもかなり大きい土坑である。位置関係はY 7 - 8沿いに南北に一列に並ぶ。土器出土時のレベル（土器底面で測定）はS K17-48.95m、S K24-48.82m、S K35-48.93mとほぼ一致している。3基とも完形の土器以外の出土は確認されておらず意図的に土器のみを遺構内に埋設したのではないかと推測できる。朱塗りの土器が含まれていることから、祭りに関連したものの可能性が考えられる。

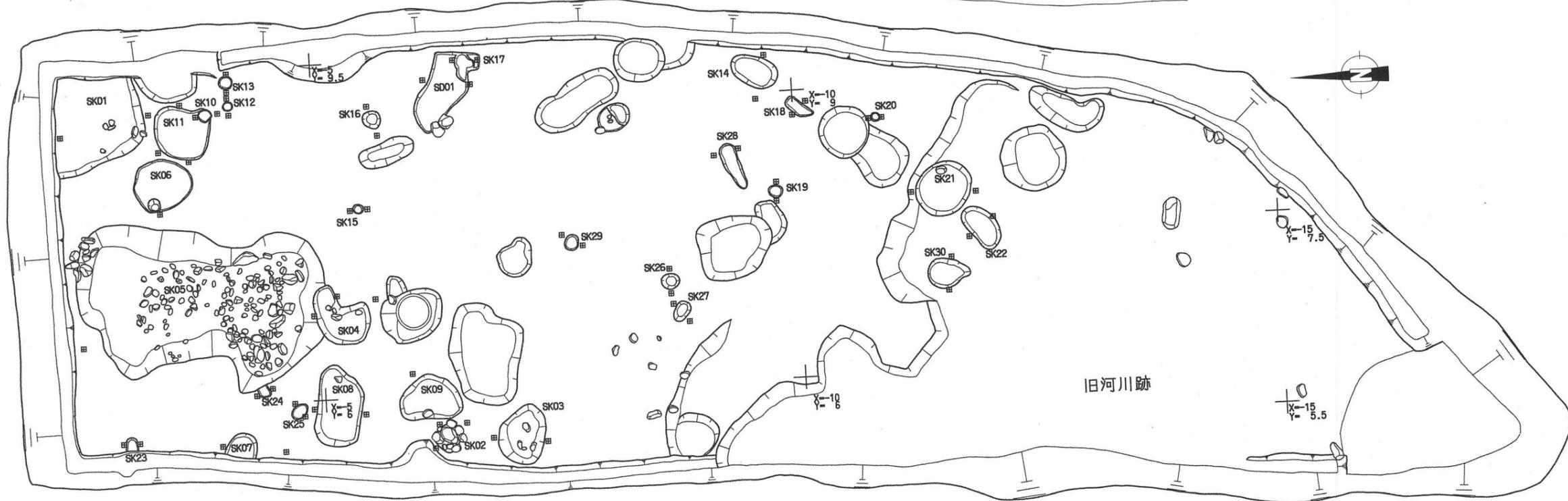
直接の関係は肯定できないが、埋設土器が出土したA Y - II ④南区から約30m離れた地点において縄文前期と考えられる住居跡と推測される配列が平成15年調査時（9頁参照）に確認されている。ほぼ北に向かって直線状に位置しており、住居跡周辺のレベル48.5m - 49.5m、南区周辺も49.2m前後と大きな差がないことから、何らかの関連があったものと推測できる。調査区東側には、平成14年度調査時に、球状耳飾の未成品や筋砥石などの工具類、土器の大型廃棄坑が確認されていることに加え、平成15年・17年度の調査区内に旧河川跡が存在していたことから、今回調査区周辺においてこの時期生活が営まれていたことがわかる。

今回の調査区前回の時代推定は出土した土器の種類から推測してこの調査区の主な時代は縄文前期・後期、中世と考えられる。

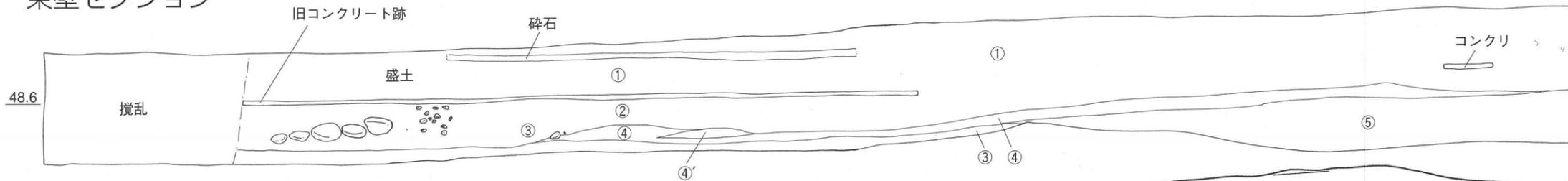
AY-II⑥北 東壁セクション



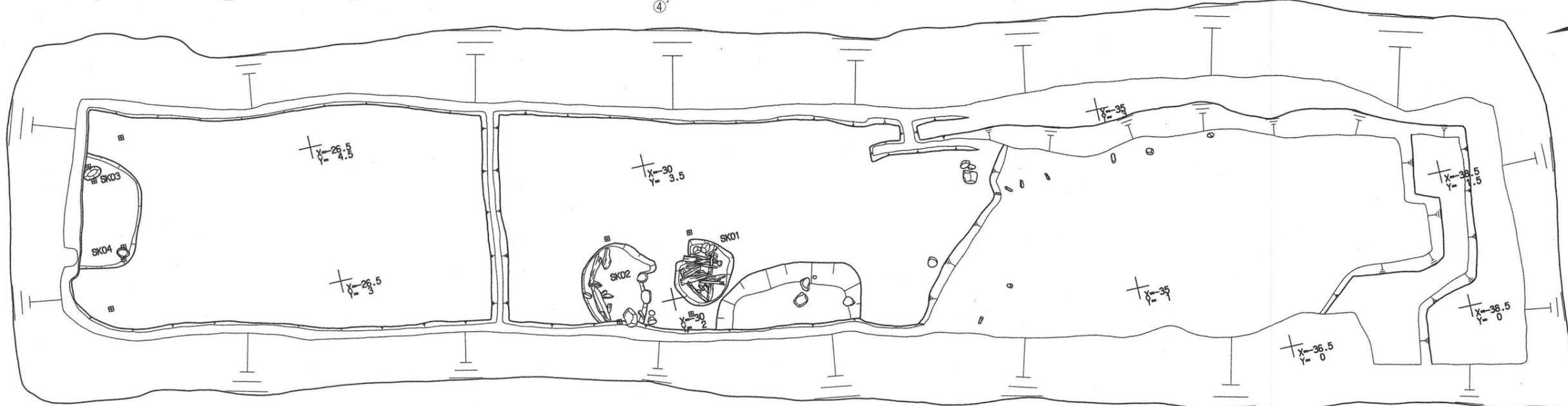
- ① 10YR3/2 黒褐色粘質土 (部分褐色混じり)
- ② 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ②' 10YR2/2 黒褐色粘質土
- ③ 地山 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土



AY-II⑥南 東壁セクション



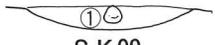
- ① 盛土 10YR3/2 黒褐色粘質土
- ② 旧盛土 10YR3/1 黒褐色粘質土
- ③ 地山 2.5YR4/2 灰赤色砂質土
- ④ 10YR3/1 黒褐色粘質土
- ④' 遺物包含層 10YR2/1 黒色粘質土
- ⑤ 河川跡 10YR3/1 黒褐色礫



第10図 平成17年度調査区全体図

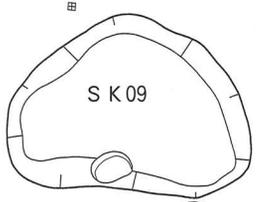
AY-II⑥北

E 49.45 W



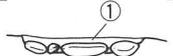
SK09

①10YR3/3 暗褐色粘質土



SK09

N 49.45 S

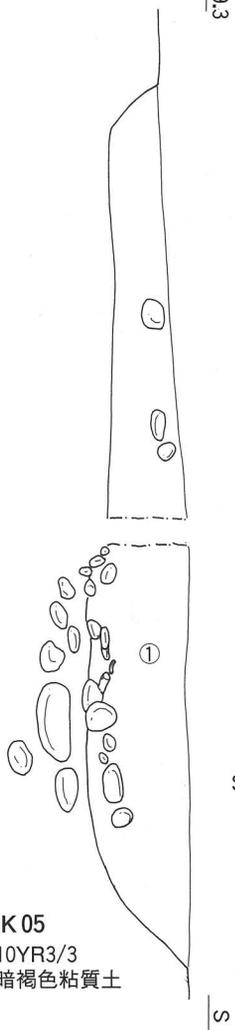


SK02

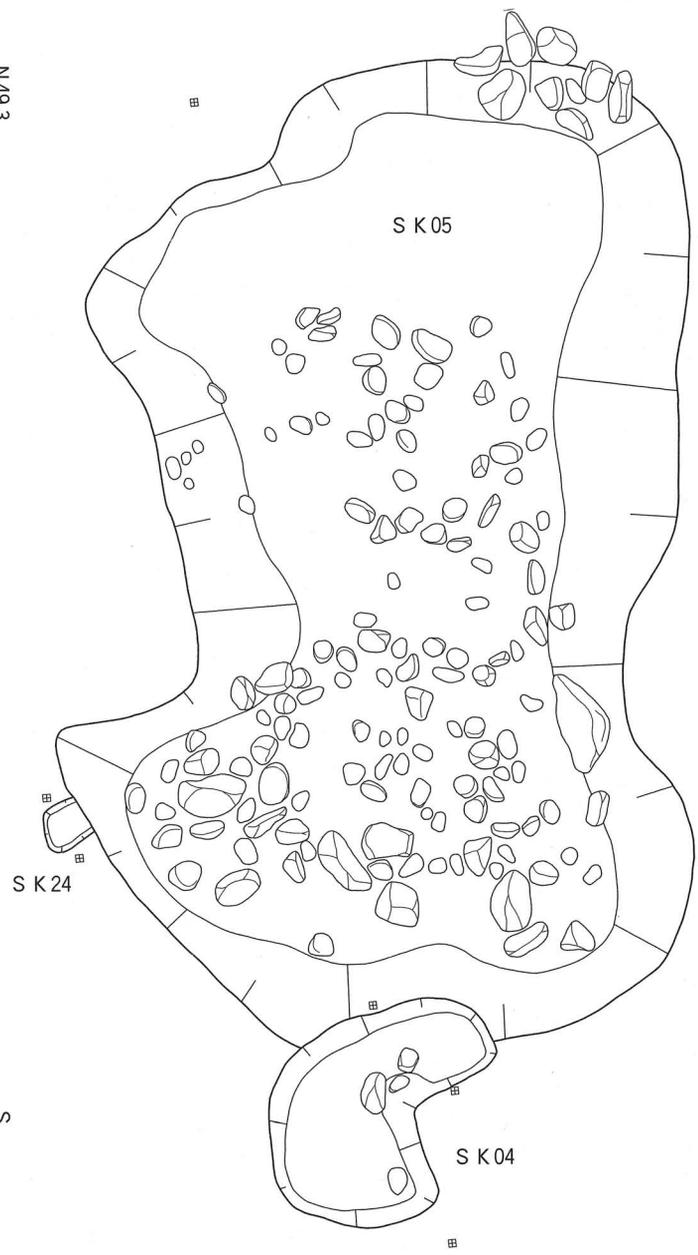
①7.5YR3/2 黒褐色粘質土



SK02



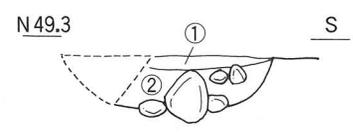
SK05
①10YR3/3 暗褐色粘質土



SK05

SK24

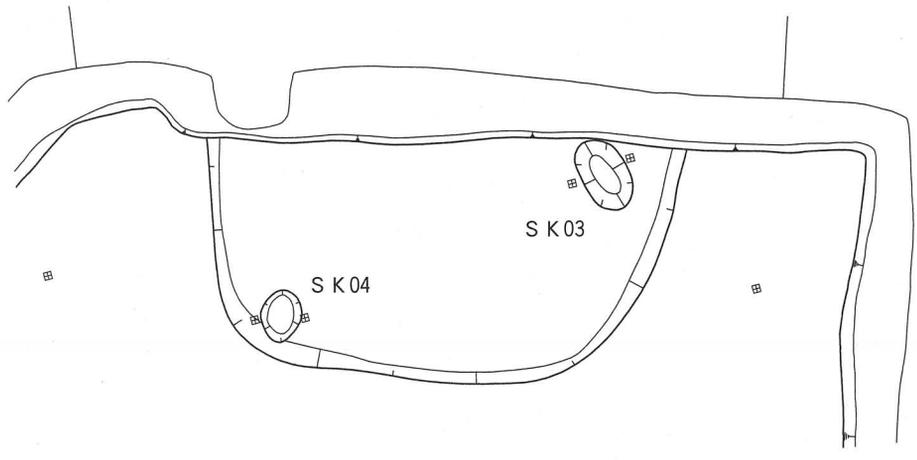
SK04



SK04

①7.5YR4/4 褐色粘質土
②5Y4/4 暗オリーブ色粘質土

AY-II⑥南



SK03

SK04

N 47.8 S



SK03

7.5YR2/1 黒色粘質土
多量の木の实出土

N 47.8 S



SK04

①10YR1.7/1 黒色粘質土
木の实出土

0 (S 1/40) 4m

第11図 AY-II⑥ 北・南区遺構 平面・土層図

第三次調査（平成17年度）

i AY-Ⅱ⑥北

全体で遺構と推測できる土坑を30基確認した。調査区南側は大量の礫が確認されており、旧河川跡と考えられる。遺構は河川跡よりも北側に集中している。また、河川跡を境に南側に向かって急激に標高が落ちている。調査区内からは産業廃棄物が埋められた穴が確認されており、遺構・遺物自体も非常に残りが悪い。住宅建設の際に遺構表面のほとんどが破壊されたものと考えられる。

SK05

調査区北側X3-5Y6-8に位置する。長軸約5m、短軸約2.5m、深さ約50cmを測り、全体に礫を轆きつめた大型の土坑である。土坑内からは縄文時代の遺物も確認されたが、青磁などの出土から考察して、中世の土坑と考えられる。用途は不明。

SK02

調査区西側に位置する。SK05の西側に位置する長軸約80cm短軸約70cmの石組遺構である。直径約40cmの平石を囲むように10~20cmの石が配列されており、真ん中の平石には焼跡が確認できる。時代はSK05と同時期の中世と考えられるが、用途は不明である。

調査区全体としては、縄文土器も出土しているが、散布された状態で、時代も縄文中期から晩期とまとまりがない。中世の遺構は残るものの、縄文の遺構は確認できなかった。中央から南側の調査区に関しては、河川の氾濫により消失したか、工事等により、他地域から土砂が移動された際に他の地域の土器が混入した可能性も考えられる。

ii AY-Ⅱ⑥南

全体で4基の土坑と旧河川を確認した。調査区全体が、北区から2mあまり落ち込みを見せる地形で河川に近づいていることが確認できた。ただ、この調査区に関しては、昭和初期まで遺構面を削平して、田畑を作っていたらしく、遺構とはほぼ同じ標高で、木製の暗渠や萱敷き、木組み等が確認された。その頃まで使用されていたと考えられる旧河川から水が浸透し、調査区のほぼ中央まで浸水する状態であったため、常に吸水し続けながら調査を行った。河川の水に関しては、清水であり、近隣から湧き出ているものと考えられる。調査区中央から南側は、旧耕作・浸水の影響により、遺構の残存状況はほぼ絶望的である。

SK01

長軸約1.2m短軸約1mの円形の土坑。木組みが確認された。ただ、木の断片が新しいため、古いものではなく、暗渠と同じく田畑の耕作時に使用されていた可能性が高い。何本か板が重なり合っていたが、特定の組み方はされておらず、廃棄されたものと考えられる。

SK03

長軸40cm短軸20cm深さ約30cmの楕円形で小型の土坑。土坑内から多量の木の実が検出された。種類はトチノミが大半を占める。

SK04

長軸30cm短軸20cm深さ約15cmの楕円形で小型の土坑。SK03と比べて深さはないが、中からは同じく木の実が検出された。

ともに縄文時代の貯蔵穴であったと考えられる。SK03・04を囲むようにして、非常になだらかではあるが調査区外に続く楕円形の掘り込みが確認された。住居跡等の関連遺構である可能性も考えられるが、周囲に柱穴等の遺構がまったく確認できないこと、調査区全体が上記に述べた通り耕作により削平されており、住居跡とは判明できず、上部遺構も消滅してしまった可能性が高い。

5 遺物

土器

調査区全体が細かく区切られているため、出土した土器は、A Y - II ④南区で出土した3点の完形品、A Y - II 住居跡および周辺出土土器を除いた地区に関しては全調査区を一括して年式別に記載する。

A Y - II ① (第一次調査)

住居跡

主に縄文前期後葉から末葉に比定される土器が出土した。大半が福浦上層式土器と考えられるが、文様別に分類した。

1類 (平成14年度柳田遺跡発掘調査報告書においては3類)

口縁部に鋸歯状印刻文を施し、胴部には結節状浮線文または細半隆起線文による渦巻文が施文される。第1図1、2は山型の波状口縁を呈する。5、7は口縁部に耳状の突起を有する。3は深鉢の胴部で、鋸歯状印刻文が平行線状に施されている。

2類 (平成14年度柳田遺跡発掘調査報告書においては5類)

a 縄文地の器面に細い粘土紐を貼付けただけのもの。爪形文などの細工はない。(8~13)

b 無文地の器面に細い粘土紐を貼付けたもの。(14・15)

3類 (平成14年度柳田遺跡発掘調査報告書においては2類)

無紋地・縄文地の器面に結節浮線紋が施文される。

a 無文地の器面に結節付線文が施され、連続爪型文の間隔が広いもの(16~23)

b 無文地の器面に結節付線文が施され、連続爪型文の間隔が狭いもの(24~28)

c 縄文地に結節浮線文と細い粘土紐を貼付け施文されたもの(29~31)

4類 節が器面に直接押印されたもの(32~36 33に三角のえぐりこみがみえる)

5類 無文地の器面に施文具の先等で線を押し引いたもの(37~40)

6類 無文地の器面に沈線文が施文されたもの(41~43)

7類 両面に結節浮線文で施文されたもの。(44)

以上の事例により、住居跡は縄文前期後葉から末葉にかけて作られたものと比定できる。

A Y - II ④南 (第二次調査)

深鉢 (58) S K35から出土。復元実測である。口縁部が外反し、胴部が張り出す形状を呈する。口径約30cm、器高40.5cmを測る。口縁部は山形で波状を呈し、一定の間隔で耳状突起と小突起がつけられている。胴部には半隆起線で渦巻文が施文され、口縁上部と胴下半部の鋸歯状印刻文で渦巻文を挟み、強調させている。胴下半部は羽状縄文が施文されている。第2類に属する。

浅鉢 (59) S K17より出土。復元実測である。口径約22.5cm、器高約6.6cmを測る。肩部に孔を有し、体部が強く屈曲する釜形を呈する。有孔罏付土器の祖形の可能性も窺える。諸磯C式の古段階に区分されるか。

(60) S K24より出土。同じく復元実測である。口径約22.5cm、器高約8.1cmを測る。口縁部に1条の爪形文が廻る。胴部表面には朱塗りが施されており、何らかの儀式的要素が含まれていた可能性が高い。また、口縁部内側に4方向に滑り止めの様な突起が付く。類例が少なく、詳細は明らかではないが(59)の蓋部分として制作された可能性も考えられる。同じく諸磯式に分類されるか。

その他

同調査区は大半の地域で縄文前期の土器が数多く出土するが、若干他の時代の土器も含まれる。

(54) A Y - II ①中地区より出土。注口土器の突起。縄文時代後期中葉の加曾利B式と考えられる。

(53) A Y - II ⑥南区より出土。注口土器か壺の胴部と考えられる。十腰内式のIV~V式か。

(50・51・52…A Y - II ①中・53…A Y - II ⑥南) とともに縄文後期中葉以降の土器か。(51)には朱塗りが施されている。

(56) A Y - II ④南区より出土。土製耳飾欠損品。後期末頃か。

S K 53 (A Y - II ①中)

鉢形土器 (57)

復元実測である。全体の約半分が残存した状態で確認された。口径約10.5cm、器高約6cmを測る。口縁部から胴部にかけては無文。底部のみに縄文が施されている。縄文時代後期と考えられ、出土地点は住居跡に近いが、直接の関係はないものと推測される。

石器

第一次調査から第三次調査まですべての範囲で石器類が確認されたため、一括して表記する。

打製石斧

器形がわかるもので撥形が4点、短冊形が2点計6点確認された。他にも欠損品及び未成品が多数出土している。石材はすべて砂岩が用いられており、(53)は長さ183mm重さ614gを測る大型の石斧である。大半が第二次調査A Y - II ④南区のS K 01・02から出土している。

磨製石斧

定角式の磨製石斧の完形品が6点、(うち小形4点)欠損品7点、磨製石斧完形品が2点、その他未成品がA Y - II ④南区S K 01・02あわせて24点出土している。すべて材質は蛇紋岩製である。(30)は非常に小型の石器であり、基部に穿孔途中の孔がある。用途は不明であるが装飾的な意味合いが強いと考えられるか。(49)は磨製石斧を敲石に転用した痕跡が残る。蛇紋岩原石24点砥石5点・筋砥石も3点大きめのものがS K 01・02内で出土しており、遺跡内で磨製石斧等の制作が行われていた可能性が考えられる。

石鏃

完形品の凹基無茎石鏃が6点(ハリ質安山岩1点・頁岩2点・下呂石1点・黒曜石2点)欠損品1点(黒曜石)基部と先端が欠損した有茎石鏃(珪岩)が一点、石鏃の欠損品1点(黒曜石)が出土した。(76)は縁辺が鋸歯状に加工されている。(72)はA Y - II ①中区の住居跡内から出土。東北・長野・岐阜産の石が多用されており、当時の交流の広さが窺われる。

石匙

すべて完形品である。縦型石匙2点(ハリ質安山岩・安山岩)横型石匙5点(ハリ質安山岩2点・玉髓1点・黒曜石1点)が出土した。(24)は刃部以外の面ではもとの黒曜石の表面状態を残している。

玦状耳飾

玦状耳飾は3点出土した。すべて欠損品である。(78)はA Y - II ①中区の住居跡内から出土した。矩形(樋口清之氏分類A類)で蛇紋岩製である。(2・7)は円形(同C類)に比定される。2点とも滑石製である。(7)は玦状耳飾上部欠損部分を再研磨し穿孔している。なお、玦状耳飾に関しては、平成14年度柳田遺跡発掘調査において、A類欠損品5点、B類未成品・欠損品があわせて7点確認されている。

垂玉

2点出土している。(10)は蛇紋岩製で用途は不明であるが頭部が膨らみ尾部が細くなる勾玉形を呈する。尾部には刻み込みが1条通る。穿孔はない。未成品と考えられる。

玉類

玉類は4点出土した。(82)は完形品で円形を呈し、周囲は研磨整形されている。直径10mm、中央に3mmの穿孔が施されている。滑石製。

石製品制作道具

砥石14点、筋砥石6点、(破損含む)凹石12点、敲石7点が出土している。

剥片・原石

A Y - II ①中区住居跡からは黒曜石の剥片136点瑪瑙2点翡翠剥片1点表面が扁平に研磨された蛇紋岩加工品1点が出土している。この他住居跡周辺外からも黒曜石剥片が131点と小形の蛇紋岩原石4点が出土している。蛇紋岩は小形磨製石斧や塊状耳飾の材料として収集したものであろう。その他破損した石棒（胴部のみ）が出土している。

炭化した栗も確認された。

A Y - II ④北区では黒曜石23点、玉髓4点、中区では黒曜石44点、玉髓6点、北区では黒曜石47点、玉髓4点が確認された。この他、蛇紋岩原石・剥片も多数確認されている。

また、A Y - II ⑥北区では石冠と石棒の欠損品が出土しており、工事等による攪乱が行なわれる以前は何らかの遺構が存在していた可能性が高い。

第2表 柳田遺跡出土石製品属性表

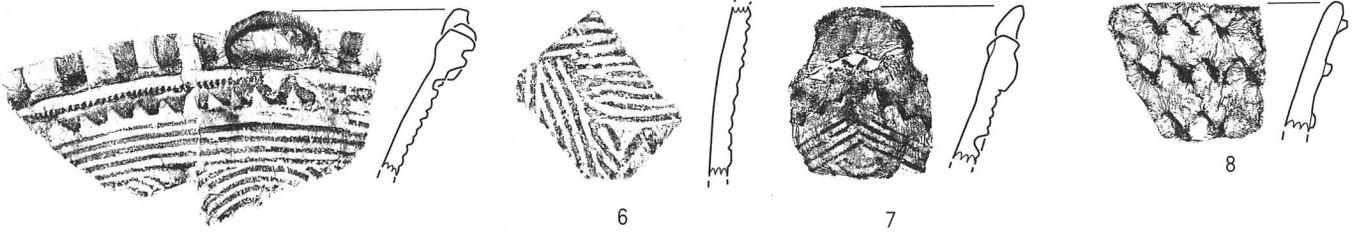
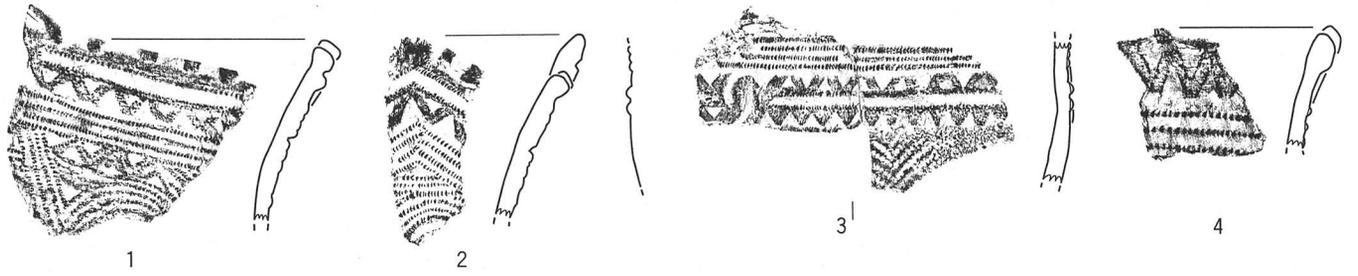
第一次調査…平成15年度 第二次調査…平成16年度 第三次調査…平成17年度

空白は報告書未収録

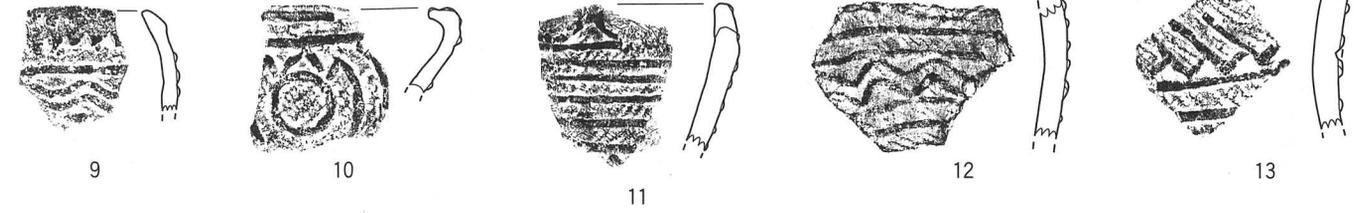
調査年度	出土地点	遺構名	通番	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	所見
第一次	AY-II①中	SK122	88	削器	珪岩	43.0	30.0	11.0	13.0	
第一次	AY-II①中	SK122	85	両極石器	鉄石英	43.0	28.0	13.0	14.3	
第一次	AY-II①中	SK122	87	剥片	玉随?	45.0	28.0	8.0	8.3	
第一次	AY-II①中	SK122	86	楕円礫	蛇紋岩	61.0	38.0	12.0	38.9	一部表面が研磨されている。
第二次	AY-II④南		18	有茎鏃	珪岩	30.7	16.8	3.5	1.7	基部と先端欠損。
第一次	AY-II①中		73	凹基鏃	ハリ質安山岩	19.0	21.0	3.0	0.7	
第二次	AY-II④南	SK29	20	凹基鏃	頁岩	24.6	15.6	3.6	1.2	
第一次	AY-II④中		22	凹基鏃	頁岩	25.5	14.8	3.8	1.3	
第一次	AY-II①中		76	凹基鏃	下呂石	22.0	18.0	3.0	1.0	縁辺が鋸歯状に加工されている。
第二次	AY-II④南	SK33	19	凹基鏃	黒曜石	17.9	15.2	2.7	0.5	
第一次	AY-II①中	住居跡	72	凹基鏃	黒曜石	16.0	16.0	4.0	0.8	
第一次	AY-II①中		75	凹基鏃	黒曜石	17.0	13.0	3.0	0.4	
第一次	AY-II①中		21	石鏃	黒曜石	18.6	13.0	5.2	1.1	
第二次	AY-II④南		23	石錐?	珪岩	27.6	22.2	6.7	3.8	
第一次	AY-II②南		70	縦形石匙	ハリ質安山岩	24.0	36.0	4.0	4.8	
第一次	AY-II②南		71	縦形石匙	安山岩	47.0	15.0	7.0	5.2	表面が著しく風化している。
第二次	AY-II④南	SK17	24	横形石匙	黒曜石	23.0	30.3	8.0	4.3	刃部が摩耗している。
第二次	AY-II④中		25	横形石匙	玉随?	37.2	47.7	8.2	10.0	
第二次	AY-II④南		26	横形石匙	赤珪岩	24.1	26.1	5.5	3.0	
第一次	AY-II①中	SK53	69	横形石匙	ハリ質安山岩	32.0	30.0	6.0	4.6	
第一次	AY-II①中	SK53	74	横形石匙	ハリ質安山岩	40.0	40.0	7.0	8.5	
第一次	AY-II①中	住居跡	28	両面加工石器	赤珪岩	57.9	40.0	17.1	30.3	
第一次	AY-II①中	住居跡	27	両極石器	玉随?	45.6	24.8	13.9	12.9	
第一次	AY-II①中		77	両極石器	瑪瑙	50.0	15.0	12.0	8.5	
第二次	AY-II④南	SK02	34	打製石斧	砂岩	81.0	50.5	23.2	150.2	
第三次	AY-II⑥北		37	打製石斧	砂岩	14.2	73.1	18.3	153.7	未図化
第三次	AY-II⑥北		38	打製石斧	砂岩	154.9	103.0	37.8	570.2	未図化
第二次	AY-II④南	SK02	39	打製石斧	砂岩	150.4	101.2	29.8	467.9	未図化
第二次	AY-II④南	SK01	40	打製石斧	砂岩	131.6	80.7	30.0	462.8	未図化。刃部欠損。
第二次	AY-II④南	SK01	53	打製石斧	砂岩	183.1	67.9	37.6	614.5	
第二次	AY-II④中		30	定角式磨製石斧	蛇紋岩	29.8	7.4	3.6	1.6	
第二次	AY-II④南	SK28	31	定角式磨製石斧	蛇紋岩	42.4	13.0	4.3	4.1	
第二次	AY-II④南		32	定角式磨製石斧	蛇紋岩	51.2	28.6	8.7	22.0	
第一次	AY-II①中		83	定角式磨製石斧	蛇紋岩	24.0	25.0	11.0	8.7	基部のみ残存。

調査年度	出土地点	遺構名	通番	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	所見
第一次	AY-II①中		84	定角式磨製石斧	蛇紋岩	43.0	25.0	7.0	13.5	
第二次	AY-II④南	SK02	45	定角式磨製石斧	蛇紋岩	59.1	56.5	17.6	96.3	基部欠損。
第三次	AY-II⑥北		47	定角式磨製石斧	蛇紋岩	87.7	53.6	25.6	182.0	刃部欠損。
第二次	AY-II④南	SK01	48	定角式磨製石斧	蛇紋岩	92.5	53.0	18.6	156.6	刃部欠損。
第二次	AY-II④南	SK01	50	定角式磨製石斧	蛇紋岩	97.1	59.4	23.2	250.1	刃部欠損。
第二次	AY-II④南	SK01	51	定角式磨製石斧	蛇紋岩	126.6	58.6	30.3	326.8	
第二次	AY-II④南	SK02	52	定角式磨製石斧	蛇紋岩	118.2	42.3	30.8	287.5	刃部欠損。
第二次	AY-II④南	SK02	46	定角式磨製石斧	砂岩	51.2	70.9	25.4	141.9	
第二次	AY-II④南	SK01	44	磨製石斧	蛇紋岩	80.3	42.3	18.2	95.5	
第三次	AY-II⑥北		49	磨製石斧	蛇紋岩	90.1	45.6	26.0	162.2	敲石に転用している。敲打整形みられる。
第二次	AY-II④南		33	磨製石斧未製品	蛇紋岩	78.4	31.1	13.4	40.8	
第三次	AY-II⑥南		36	磨製石斧未製品	蛇紋岩	47.8	43.2	10.2	32.6	一部表面が研磨されている。
第二次	AY-II④南	SK02	54	磨製石斧未製品	蛇紋岩	105.3	70.0	28.5	351.0	
第二次	AY-II④南	SK02	56	磨製石斧未製品	蛇紋岩	119.8	77.6	37.0	421.1	
第三次	AY-II⑥北	SK05	67	石棒	(細粒)砂岩	164.0	73.2	50.4	586.6	
第三次	AY-II⑥北		68	石冠	(細粒)砂岩	53.2	128.5	58.0	382.8	
第二次	AY-II④北		2	球状耳飾	滑石	38.1	23.2	9.2	10.0	
第三次	AY-II⑥南		7	球状耳飾	滑石	37.3	24.7	7.1	8.2	球状耳飾を再加工した。
第一次	AY-II①中		78	球状耳飾	蛇紋岩	53.0	17.0	5.0	6.5	
第二次	AY-II④北		1	玉製品	凝灰岩	22.3	29.4	9.8	7.0	
第三次	AY-II⑥南		4	玉製品	滑石	10.9	12.6	5.2	0.8	
第一次	AY-II①中		81	玉製品	赤珪岩?	17.0	17.0	5.0	1.9	
第一次	AY-II②南		82	玉製品	滑石	11.0	11.0	5.0	0.8	
第一次	AY-II①中		6	垂飾品	滑石	28.9	11.1	8.6	4.0	
第三次	AY-II⑥南		10	垂飾品	蛇紋岩	59.1	26.9	14.2	26.5	
第一次	AY-II②南		3	管玉未製品	凝灰岩	22.0	10.5	7.2	3.4	古墳時代か?
第二次	AY-II④北		8	円盤状石製品	滑石	19.8	20.5	4.6	2.5	古墳時代か?
第一次	AY-II①中		79	玉未製品	滑石	49.0	25.0	9.0	16.7	古墳時代か?
第一次	AY-II①中	SK33	80	玉未製品	滑石	28.0	12.0	8.0	3.2	古墳時代か?
第二次	AY-II④北		16	石製品	安山岩	42.5	41.7	7.3	23.2	古代以降の石製品。
			57	筋砥石	砂岩	99.1	95.1	86.6	997.4	
			58	筋砥石	砂岩	125.8	145.5	82.1	2014.5	
			59	筋砥石	砂岩	160.5	144.3	82.1	2536.5	
			89	砥石	砂岩	320.0	285.0	70.0	7437.9	破損している。
第三次	AY-II⑥北		55	敲石	蛇紋岩	110.3	64.7	35.1	412.0	
第二次	AY-II④南	SK02	61	敲石	砂岩	128.7	85.7	32.9	452.4	
第二次	AY-II④中		65	敲石	砂岩	129.9	55.5	26.3	310.9	
第二次	AY-II④南	SK02	60	敲石+(磨石)	砂岩	97.5	88.3	46.2	524.5	表裏に不明瞭な磨面みられる。
			62	敲石+磨石	安山岩	92.7	74.2	42.1	395.4	
			63	敲石+(磨石)	砂岩	101.2	91.9	47.9	560.0	表裏に不明瞭な磨面みられる。
			64	敲石+磨石	安山岩	104.3	77.6	42.1	497.2	
			66	特殊磨石	砂岩	78.0	149.4	50.8	681.5	
第二次	AY-II④中		11	亜角礫	玉随	29.5	24.7	16.1	14.5	
第二次	AY-II④南	SK01	12	亜角礫	翡翠	55.7	34.1	20.3	46.8	
第二次	AY-II④中		14	亜角礫	翡翠	39.0	37.4	20.6	53.0	
第二次	AY-II④南	SK28	15	亜角礫	翡翠	25.8	23.9	8.8	9.0	
第一次	AY-II①中	SK18	13	楕円礫	蛇紋岩	60.3	35.3	15.6	49.0	
第一次	AY-II①中	SK18	17	楕円礫	蛇紋岩	52.1	34.3	14.5	42.6	
			35	楕円礫	蛇紋岩	47.4	41.1	11.1	32.0	
第一次	AY-II①中	住居跡	41	亜角礫	蛇紋岩	62.0	40.1	19.4	60.6	
第一次	AY-II①中	住居跡	42	楕円礫	蛇紋岩	59.8	50.1	21.3	89.8	
第一次	AY-II①中	住居跡	43	亜角礫	蛇紋岩	78.1	72.6	40.3	325.1	

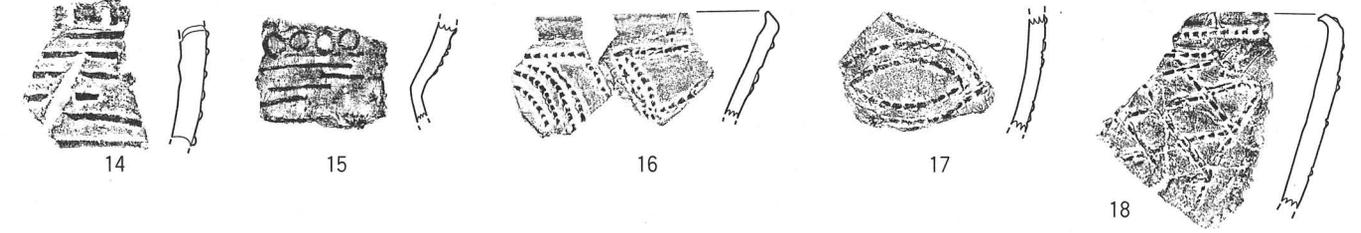
繩文土器
第1類



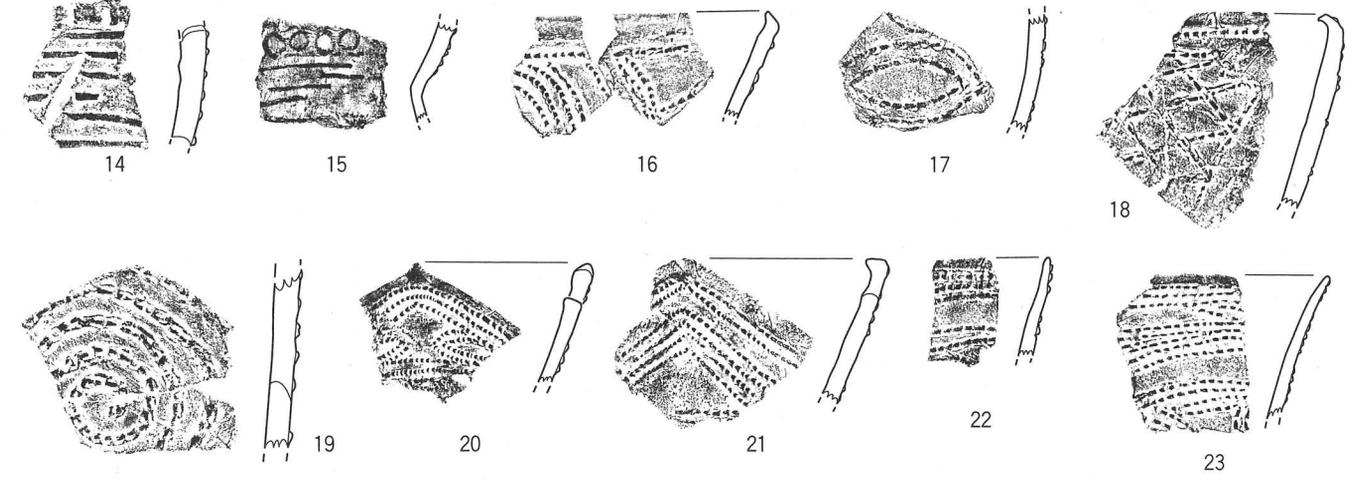
第2類 a



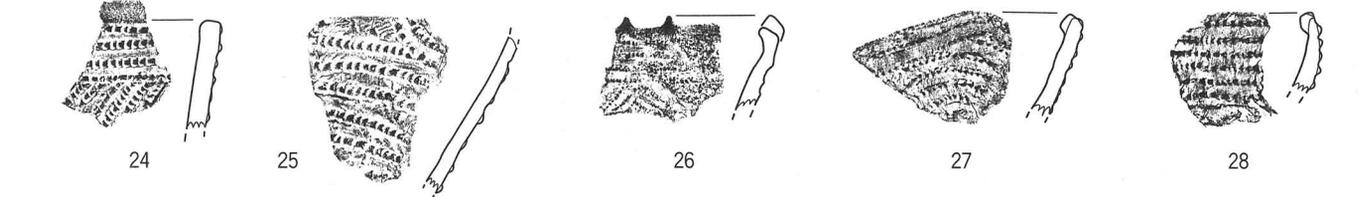
第2類 b



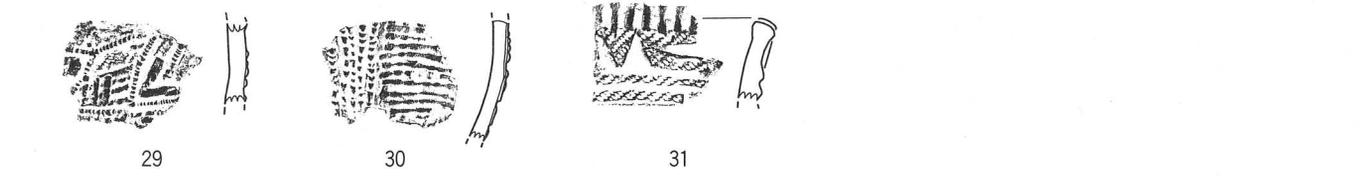
第3類 a



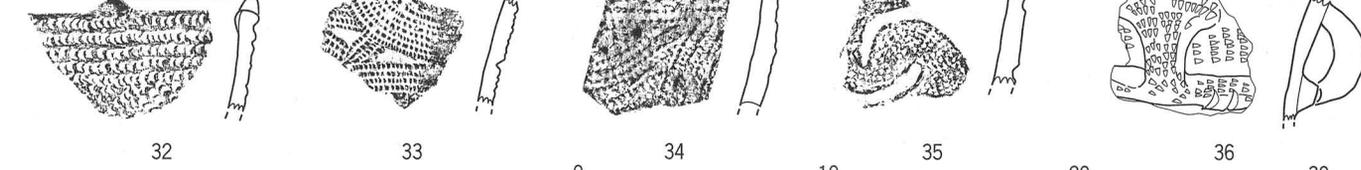
第3類 b



第3類 c



第4類



第12図 繩文土器実測図

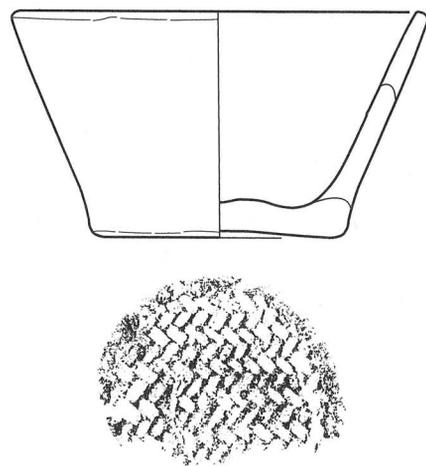
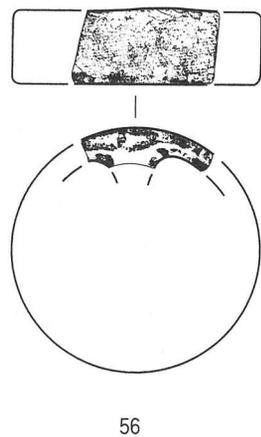
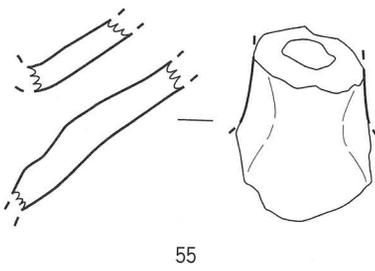
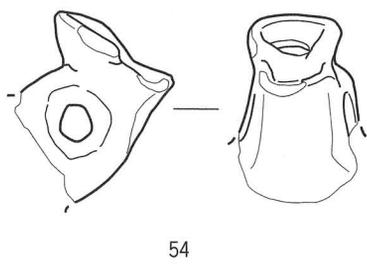
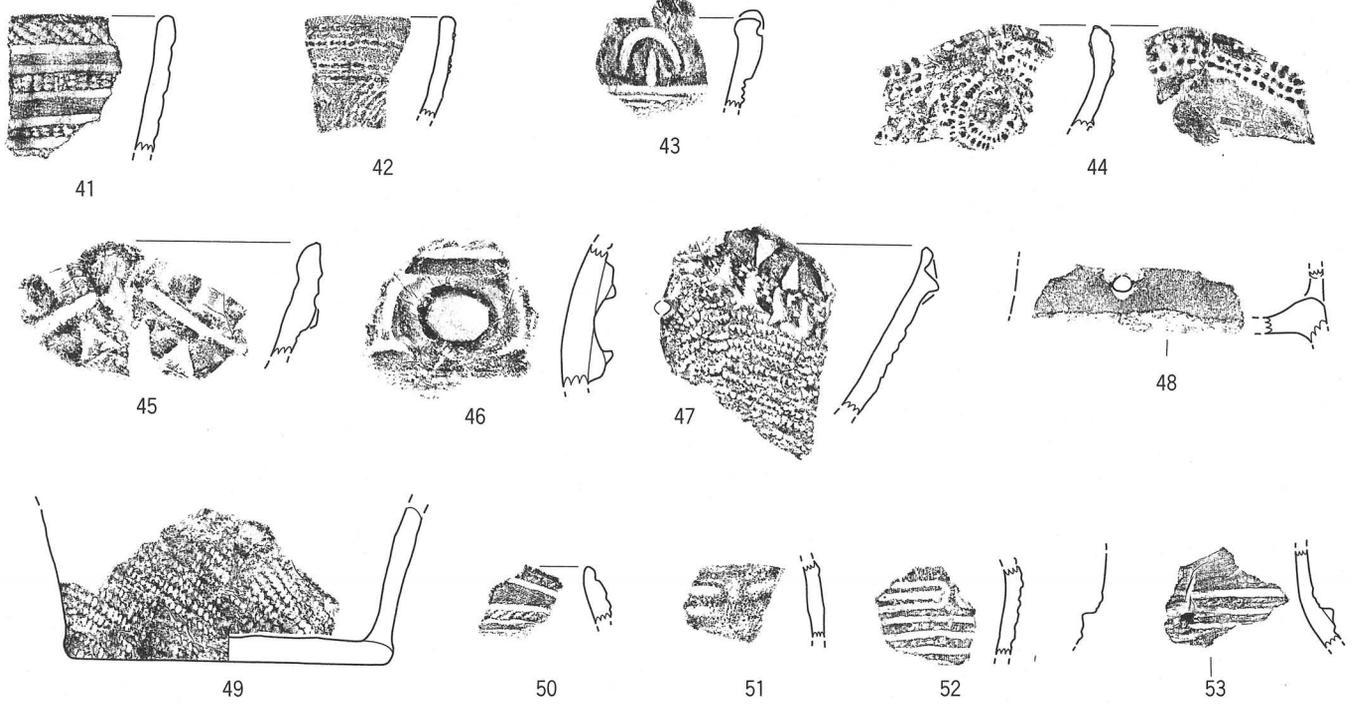
(S=1/3)



第5類

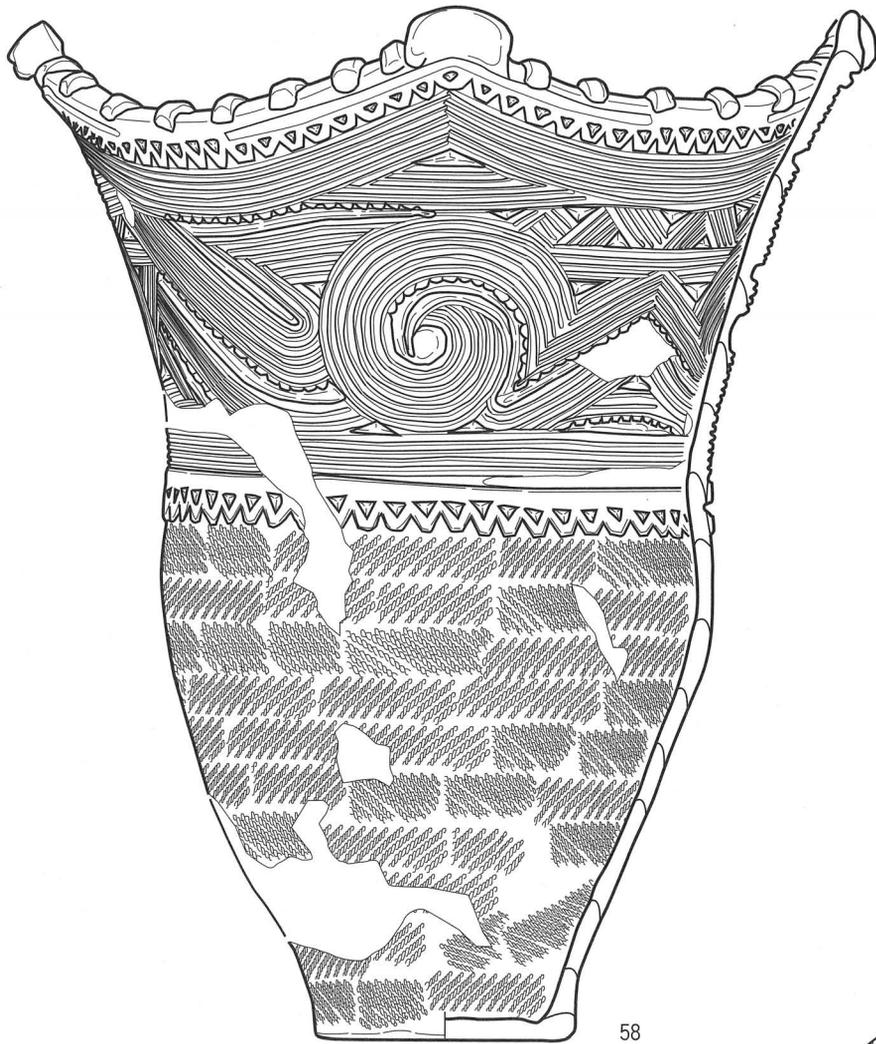


第6類

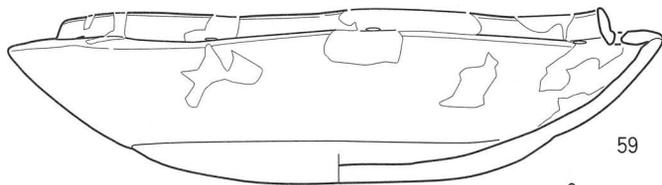
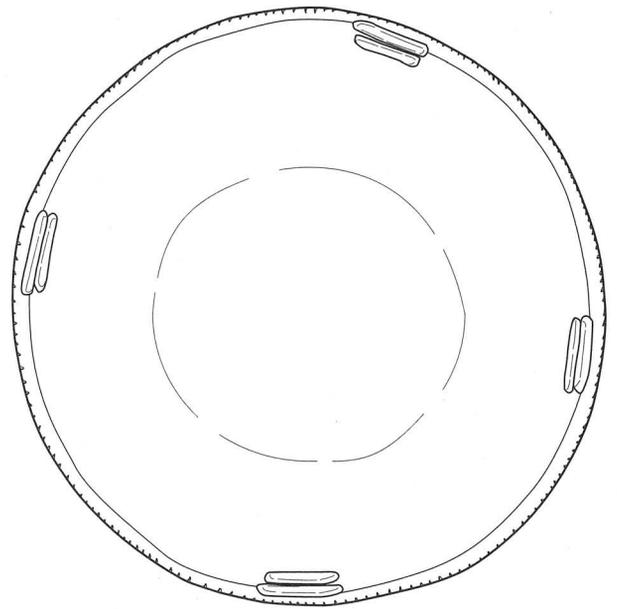


第13圖 繩文土器実測図

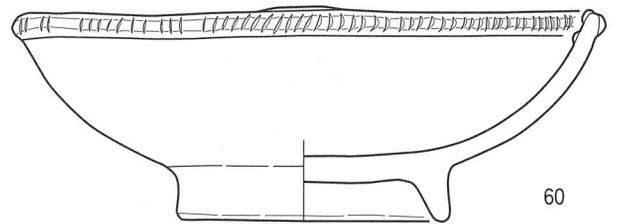




58



59



60



第14図 縄文土器 復元実測図

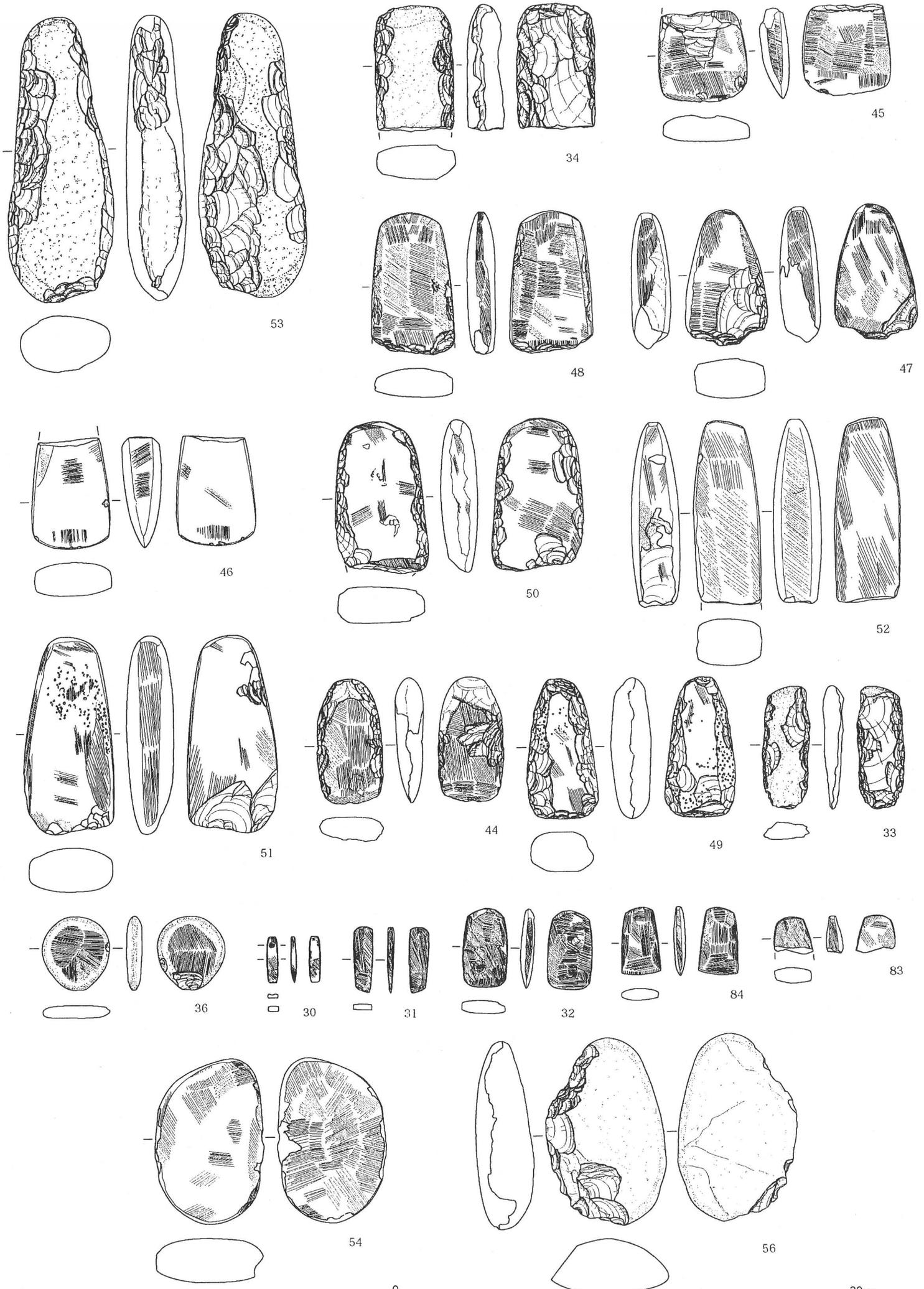


S=2:3

白抜きはガジリです。
2

(S=2/3) 0 20cm

第15図 石器実測図



第16图 石器实测图

(S 1/3) 0 26 30cm



第17図 石器実測図

まとめ

前章で述べた調査結果を要約し、調査のまとめとする。

1 柳田遺跡は黒部川旧扇状地と小川扇状地によって形成される微高地に存在し、現在約3.9haの拡がりがあることが確認されている。縄文前期から晩期、中世の遺跡として古くから知られる地域である。

今回の調査区の東側に位置する平成14年度調査区では、縄文時代の玦状耳飾欠損品、磨製石斧、翡翠、蛇紋岩、滑石等の原石、製作に使用されたと考える筋砥石等の道具類が数多く出土しており、工房の確認には至らなかったが、この遺跡周辺が石器類の製作地の可能性が高いことが予測されていた。

2 遺構

第一次調査（平成15年度）（A Y - II ①中②北③南）

3 地区に分けて調査を行った結果、①区において縄文前期の貼り床式と考えられる住居跡が1棟確認された。なお、炉跡は焼土を含む地床炉のみで石組はなく、柱穴の配列も不整長円形で壁面も明確には確認できなかったため、あくまでも推定としたい。ただし、遺構内及び周辺からは縄文土器をはじめ、玦状耳飾、石鏃、大量の黒曜石、蛇紋岩の剥片などの石製品が出土しており、14年度調査区の道路を挟み西側に位置することからも、居住区であった可能性は高いと考えられる。また、住居跡東側調査区境界の土坑内にて、小鉢型土器が破損した状態で確認された。土坑自体が調査区外に延びており、用途はわからない。この土器と住居跡との関連や時代構成は不明である。

S K 122からは4種類の加工済石（頁岩（白）黄玉（黄）蛇紋岩（緑）玉髓（紅））が一行に直立した状態で出土した。用途不明の遺構である。

第二次調査（平成16年度）（A Y - II ④-北・中・南）

同じく3地区に分けて調査を行った。3地区とも溝・土坑等遺構を確認したが、住居跡など特定の遺構は確認されなかった。

南区において、完形に近い縄文前期と考えられる土器が土坑底面に配置された状態で出土した。1.2～1.8m径の土坑に1個体ずつ配され、北に向かって一行に並んだ状態で確認された。それぞれ形状の違う土器（深鉢型1点、浅鉢型2点）が埋められ、他の遺物は土坑内からは出土しなかった。浅鉢1点は朱塗りが施されており、祭事的要素が強いものではないかと推測される。

また、この土坑群のすぐ西側において、磨製石斧・翡翠原石・砥石などが大量に混入した集石遺構が確認された。ただし、遺物自体は時代考証が幅広い。この遺構の上層は現代の生活面に標高が近く、最近まで畑作業が営まれていたこともあり、畑の整地時に、周囲の礫を集めて廃棄した穴である可能性も考えられる。

第三次調査（平成17年度）（A Y - II ⑥-北・南）

2区に分けて調査を行った。北区からは主に中世の集石遺構と石組が確認された。集石遺構内からは青磁等主に中世の遺物が出土した。玦状耳飾の欠損品が1点出土したが、遺構が作られた際に混入したものと考えられる。石組中央部にあたる平石は被熱痕がみられた。縄文土器等の遺物は散布された状態でまとまりがなく、縄文時代に関連した遺構は確認できない。北区に関しては主に中世が主体と考えられる。南区は北区から急激に2m以上にわたり標高が落ち込んでおり、浸水が激しい。旧河川と考えられる。旧河川跡水底からは数点の土師質土器が出土したが、他地区より流れ込んだ可能性がある。昭和期まで、この水流を利用した農業が行われていたらしく、木製の水路、杭、萱敷きなどが遺構と同じ標高で確認された。これらの作業によりかなり遺構面の削平が進んだものと考えられる。北側においてトチノミが埋設された貯蔵穴が2基確認された。周囲は薄く掘り込みで囲まれているが、調査区外に延びるため、住居跡等の正確な確認には至らなかった。柱穴に即した土坑は発見されていない。

3 遺物

第一次調査（平成15年度）

主に縄文時代前期から後期にかけての土器・石器類が出土した。土器に完形品はなく、度重なる工事等の削平・攪乱のためか磨耗・破損が激しく、形状・詳しい年代の特定は難しい。

S K53内より、底部にのみ縄文が施された小鉢形の土器が出土した。

石製品は球状耳飾欠損品蛇紋岩製1点、石鏃完形品4点（黒曜石・ハリ質安山岩・下呂石）、欠損品が1点（黒曜石）石匙2点（ハリ質安山岩）石製加工品2点、他、多数の黒曜石・蛇紋岩の剥片、原石が出土した。主に、住居跡周辺に集中している。石質は朝日町境海岸周辺において採取される蛇紋岩を筆頭に、黒曜石、頁岩、ハリ質安山岩など種類も豊富で、他地域との交流があったこともうかがい知れる。石斧に関しては、打製石斧、磨製石斧及び未成品、欠損品が数多く出土した。未成品の数から柳田遺跡内において、石斧を生産していたことがわかる。

第二次調査（平成16年度）

南区より縄文時代前期末葉の深鉢が1点、浅鉢が2点、復元可能な状態で出土した。深鉢の形式は福浦上層式に比定される。浅鉢の1点は、口縁部4隅に滑り止めのような加工が施されている。蓋として利用されていた可能性が伺える。もう1点は肩のある浅鉢である。この2点は別の土坑内より確認されたが重なり合う。

石製品は同じく南区のS K01、02の集石遺構において、打製石斧、磨製石斧、翡翠、蛇紋岩原石、砥石、筋砥石などが集中して出土した。現代も含めていずれかの時代の廃棄坑の可能性が考えられる。遺構自体は現場を挟む生活道の下に拡がりを見せていたため、全景の確認、すべての遺物採集はできなかった。

他のセクションからは平成15年度調査区と同じく、球状耳飾欠損品1点（滑石）石鏃完形品3点（黒曜石・頁岩）石匙完形品3点（黒曜石・玉髓・赤桂石）石製加工品3点（滑石・蛇紋岩）に加えて、北区において古代以降の円盤状石製品が出土した。

第三次調査（平成17年度）

縄文と中世の遺物が両地区から確認された。調査区自体が削平の影響をかなり受け、15年度・16年度よりも遺物の量はかなり少ない。

中世の遺物に関しては、北区S K05集石遺構からは青磁が、南区の旧河川水底より数片の土師質土器が出土した。ただし、水底であるため、他地区から水流によって混入した可能性は考えられる。

縄文時代の石製品は15・16年よりは数が少ないものの、球状耳飾欠損品（蛇紋岩）1点と勾玉型石製品（蛇紋岩）1点などの珍しい形状のものが出土した。また2基の貯蔵穴からトチノミが出土しており、時代分析は出していないが、状態からみて縄文時代のものと判断した。土器類の磨耗が激しいため、詳しい時代の特定はできなかったが、おおよそ、縄文後期中葉から末葉にかけての遺物であると推測できる。

4 結

平成15・16・17年の調査における柳田遺跡の時代構成は縄文前期から後期及び中世と考えられる。平成14年度調査区との関わりは明らかではないが、出土した遺物の種類、分布状況から判断して、同時期に一帯に拡がりを見せていた可能性は非常に高い。今回の調査では、住居跡、祭事性の高い遺構・遺物が確認された。平成14年度に出土した工房関連の遺物との関係も含めて、この時代柳田集落に居を構えた当時の人々が、石斧や石製品などを加工・製造し生活の糧としていたことが今回の調査により鮮明に浮かび上がってきたということがいえるであろう。中世については、遺構・遺物は確認されたものの数は非常に少ない。住居跡等居住区域は今回の調査区外に存在するか、工事等の攪乱・削平により大半が消滅したと考えるのが妥当であろう。

第一次調査区 (平成15年度)



A Y - II ①中区全景



A Y - II ②南区全景



A Y - II ②北区全景



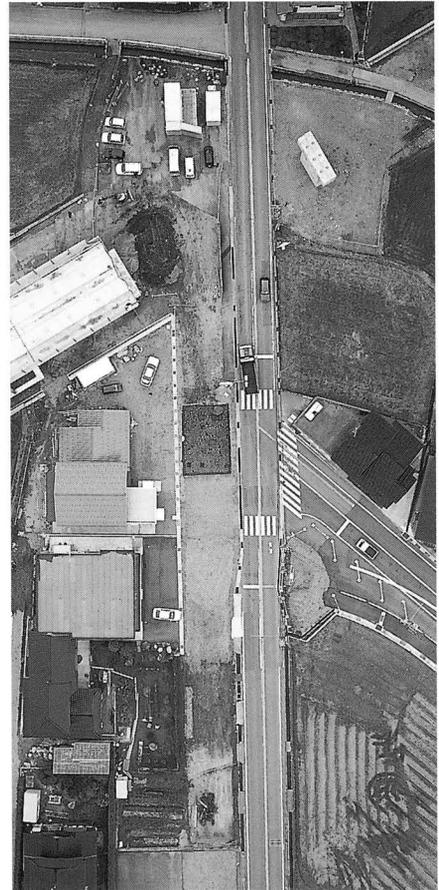
A Y - II ③全景



A Y - II ①中区遠景



A Y - II ②南・北区遠景

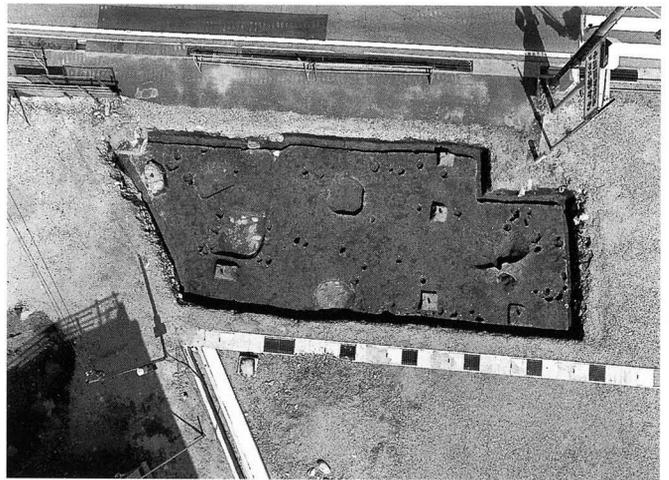


A Y - II ③遠景

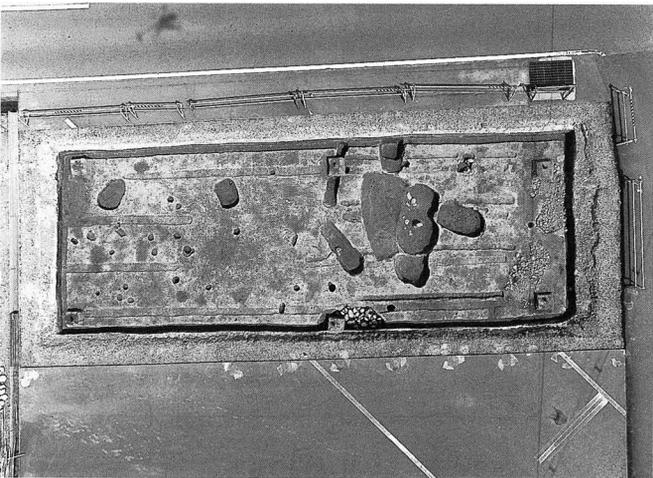
第二次調査区 (平成16年度)



A Y - II ④北区全景



A Y - II ④中区全景



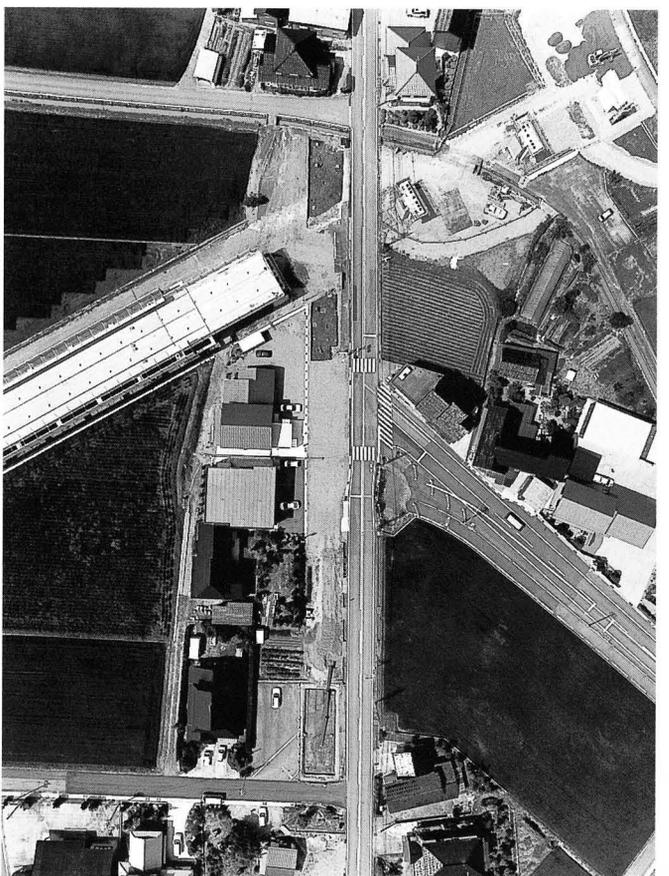
A Y - II ④南区全景



斜め遠景北より



A Y - II ④北・中区上空



A Y - II ④上空遠景

第三次調査区 (平成17年度)



A Y - II ⑥北区全景



A Y - II ⑥南区全景



A Y - II ⑥全景

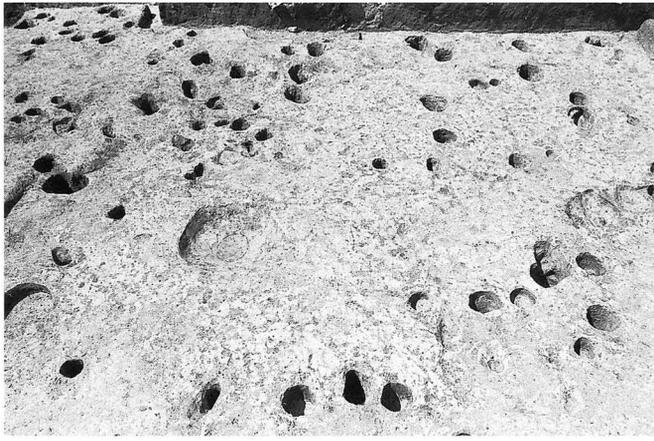


斜め遠景南より

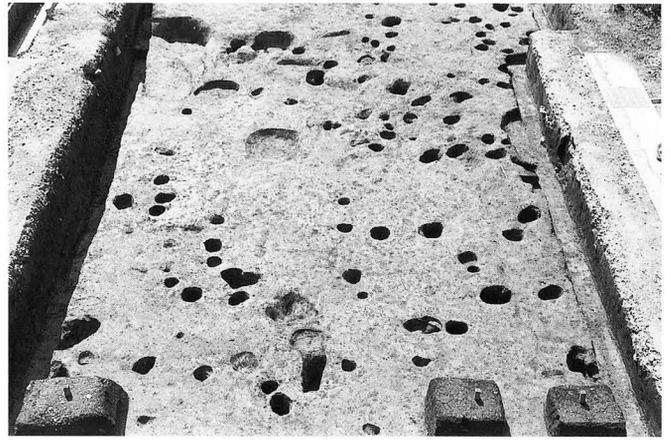


斜め遠景北より

第一次調査区 AY-II①②③ 遺構・遺物出土状況



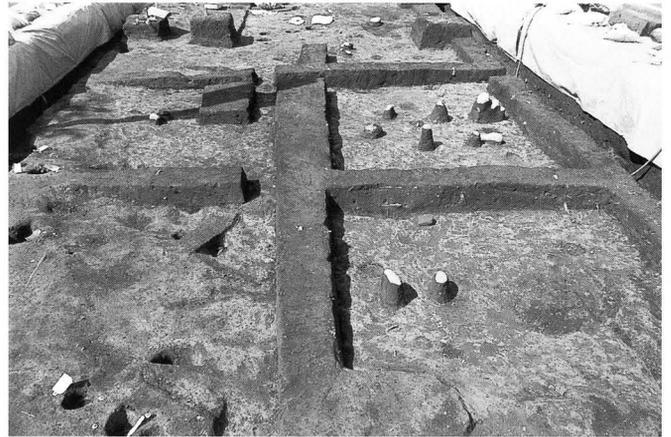
住居跡（東より）



住居跡（南より）



住居跡内地床炉（S K 239）



住居跡検出状況



住居跡出土土器



S K 53遺物出土状況



S K 53遺物出土状況（鉢形土器）



S K 122 遺物出土状況

第二次調査区 AY-II④ 遺構・遺物出土状況



北区 調査前



中央部トレンチ



S K47 遺構検出状況



東壁土層



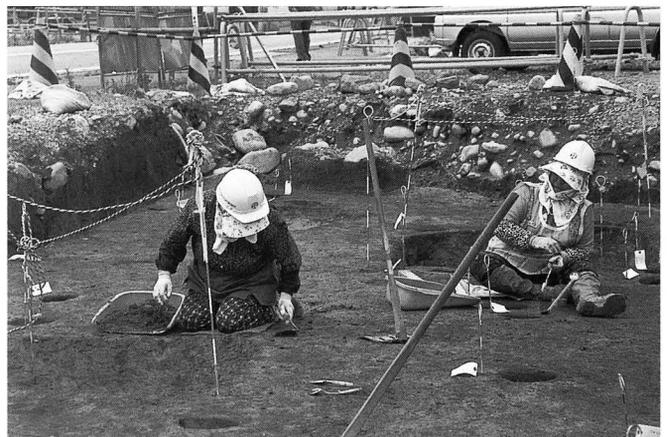
中区 調査前



中央部



北壁土層



作業風景



南区 調査前



S K01



S K01 断面



S K02



S K02内 筋砥石検出状況



作業風景



S K33



S K33断面



S K35土器検出状況



深鉢



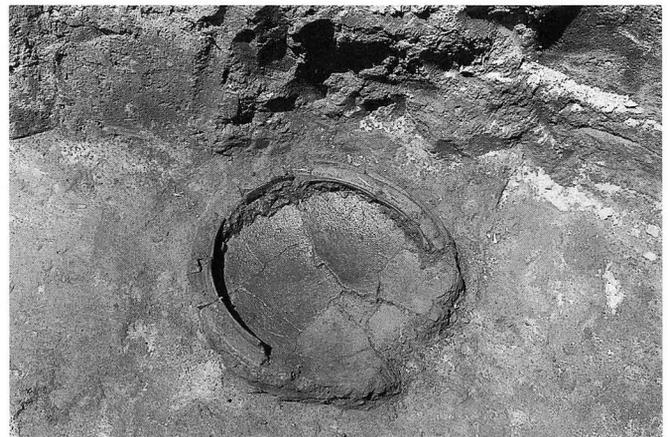
S K35 全景



S K17断面



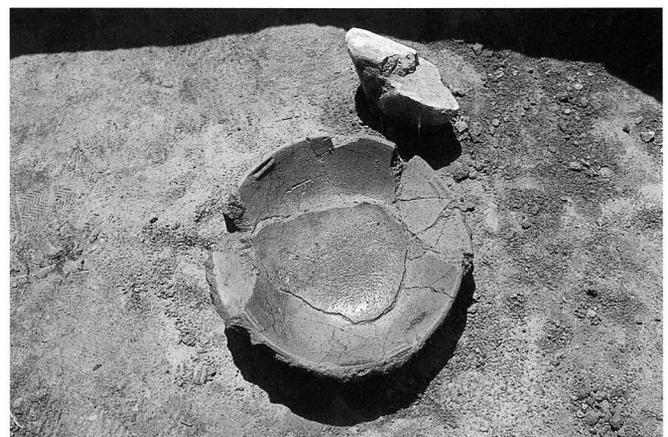
S K17土器検出状況



S K17浅鉢



S K24 土器検出状況



S K24 浅鉢

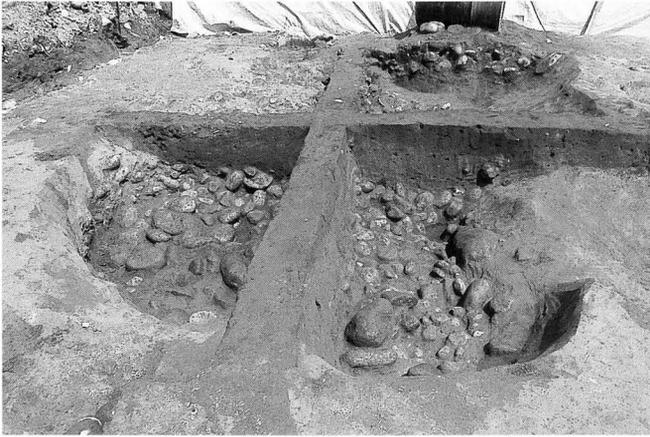
第三次調査区 AY-II⑥ 遺構・遺物出土状況



北区 調査前



S K02



S K05



東壁



南区 調査前



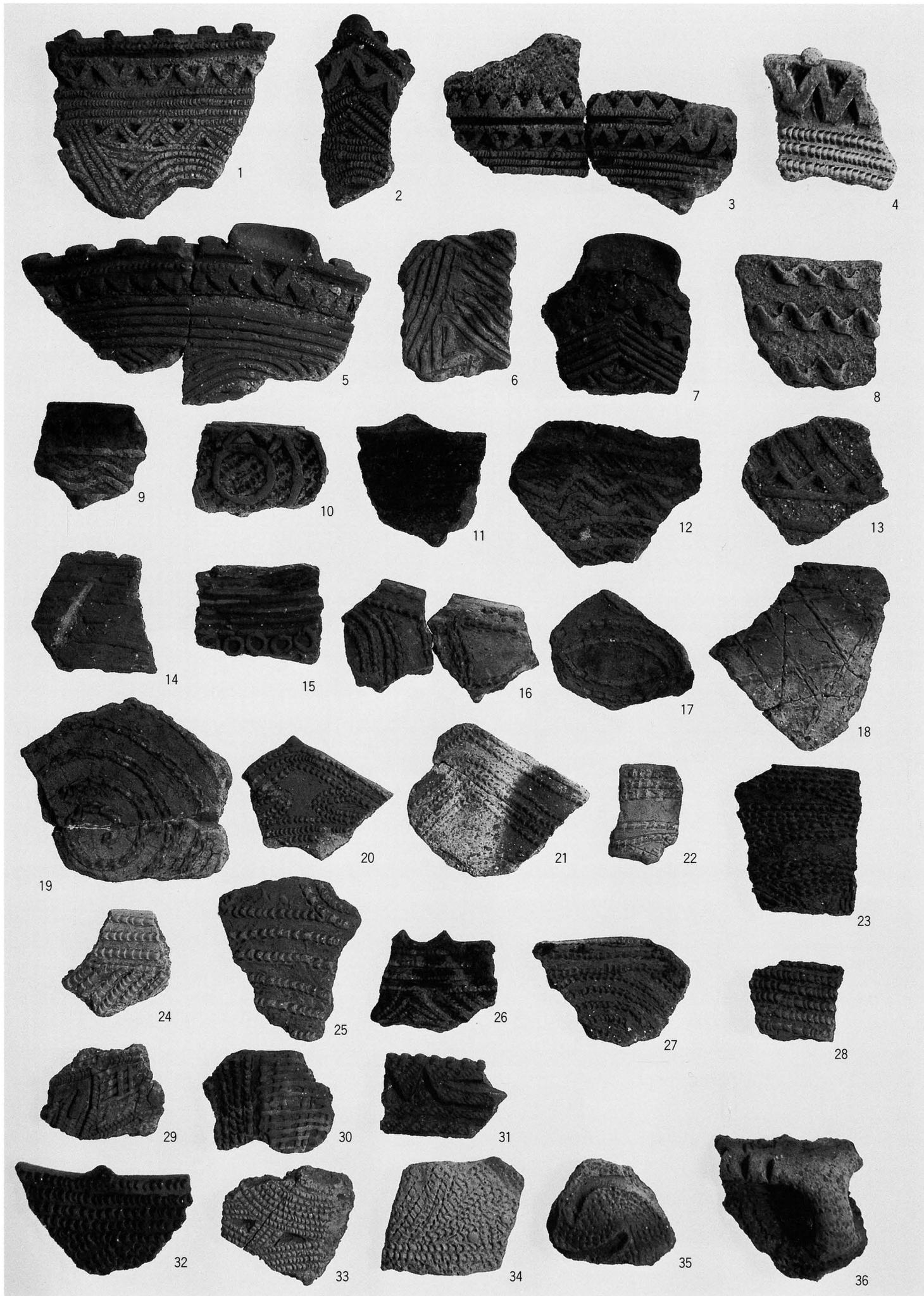
S K03 完掘



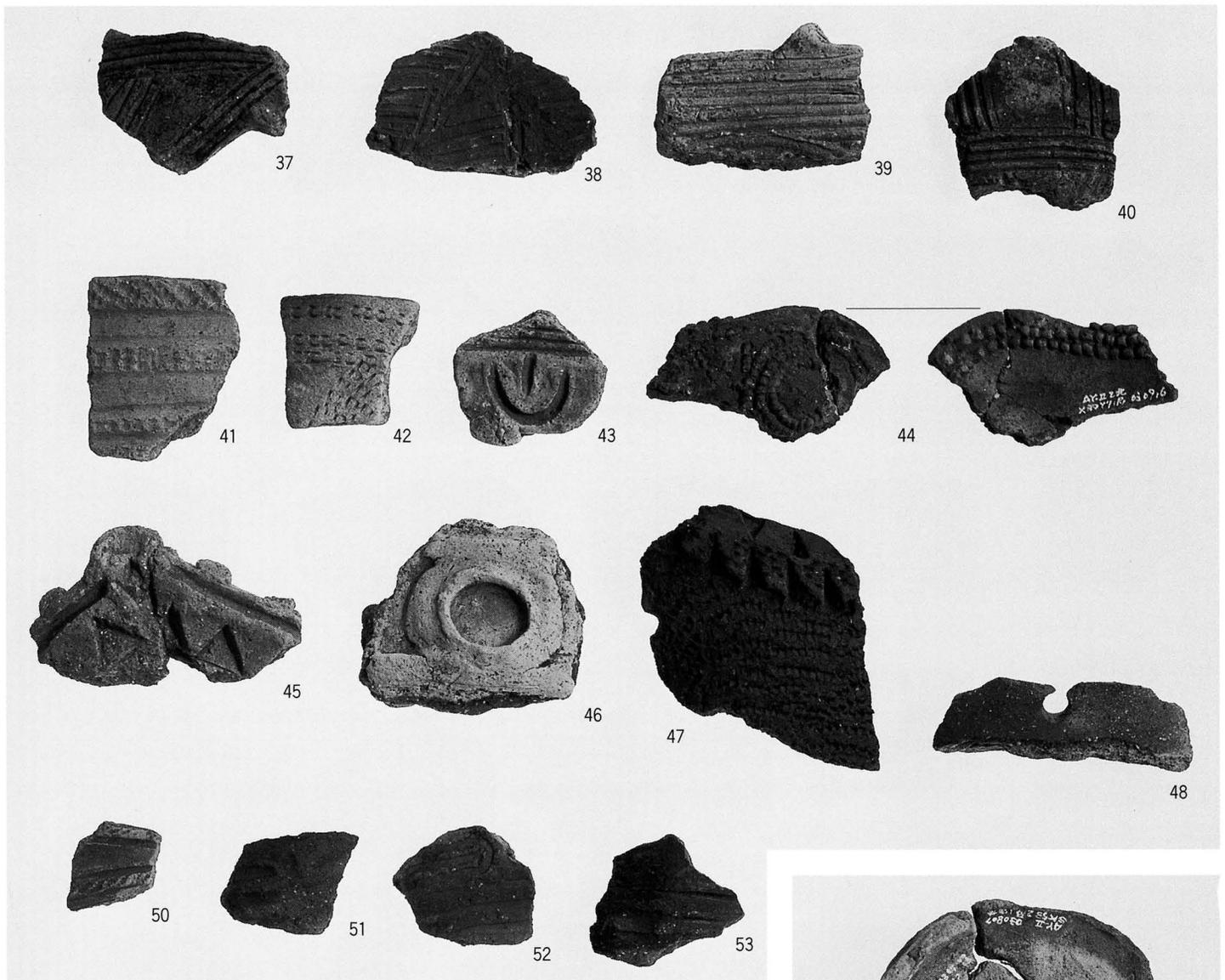
S K04



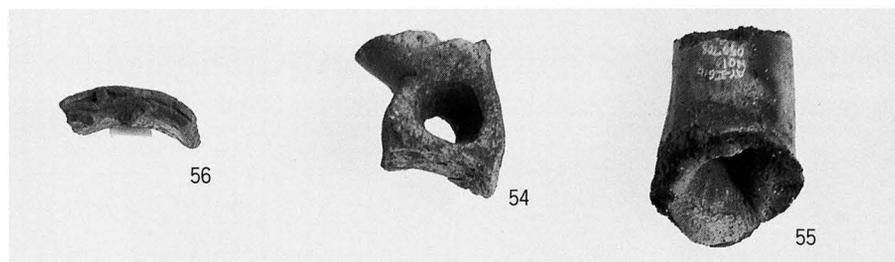
S K03・04を囲む遺構



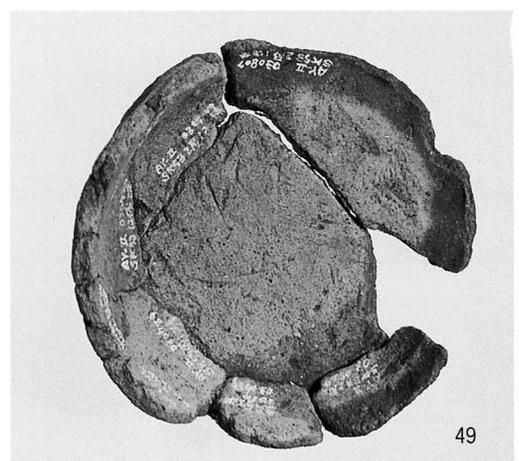
AY-Ⅱ①中区住居跡出土土器 (S=1/2)



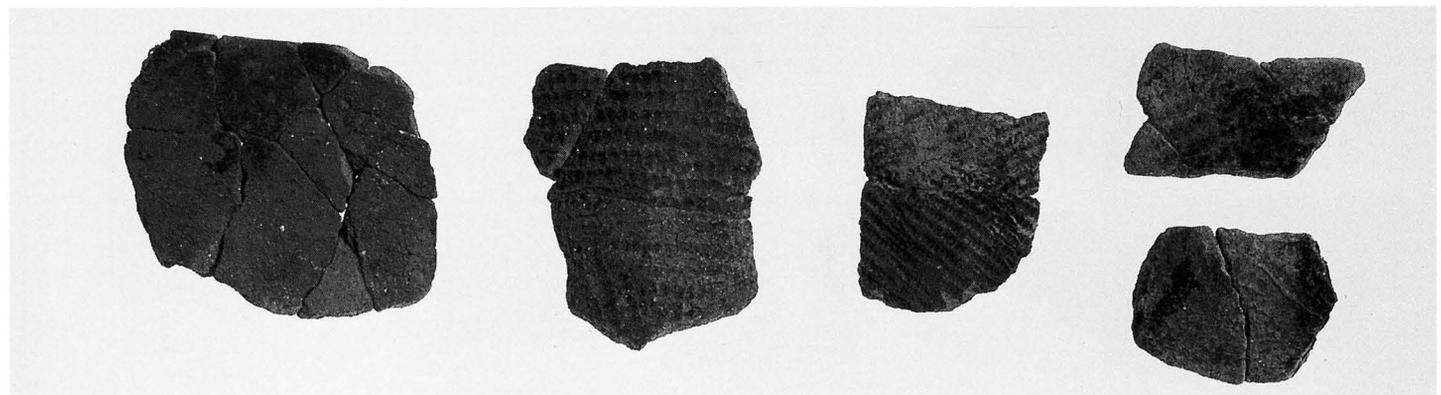
AY-Ⅱ①中区住居跡出土土器(前期) 4段目その他 後期土器(S=1/2)



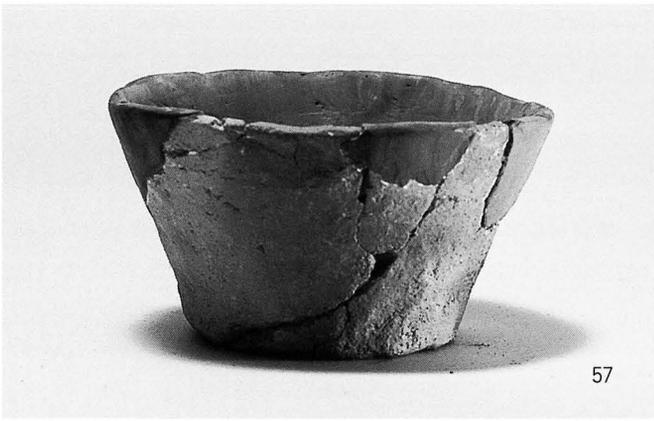
土製耳飾 注口土器 (S=1/2)



AY-Ⅱ①中区SK53出土 (S=1/2)



SK53出土 (S=1/2)



A Y - II ①中区 S K 53出土 小鉢形土器 (S = 1/2)



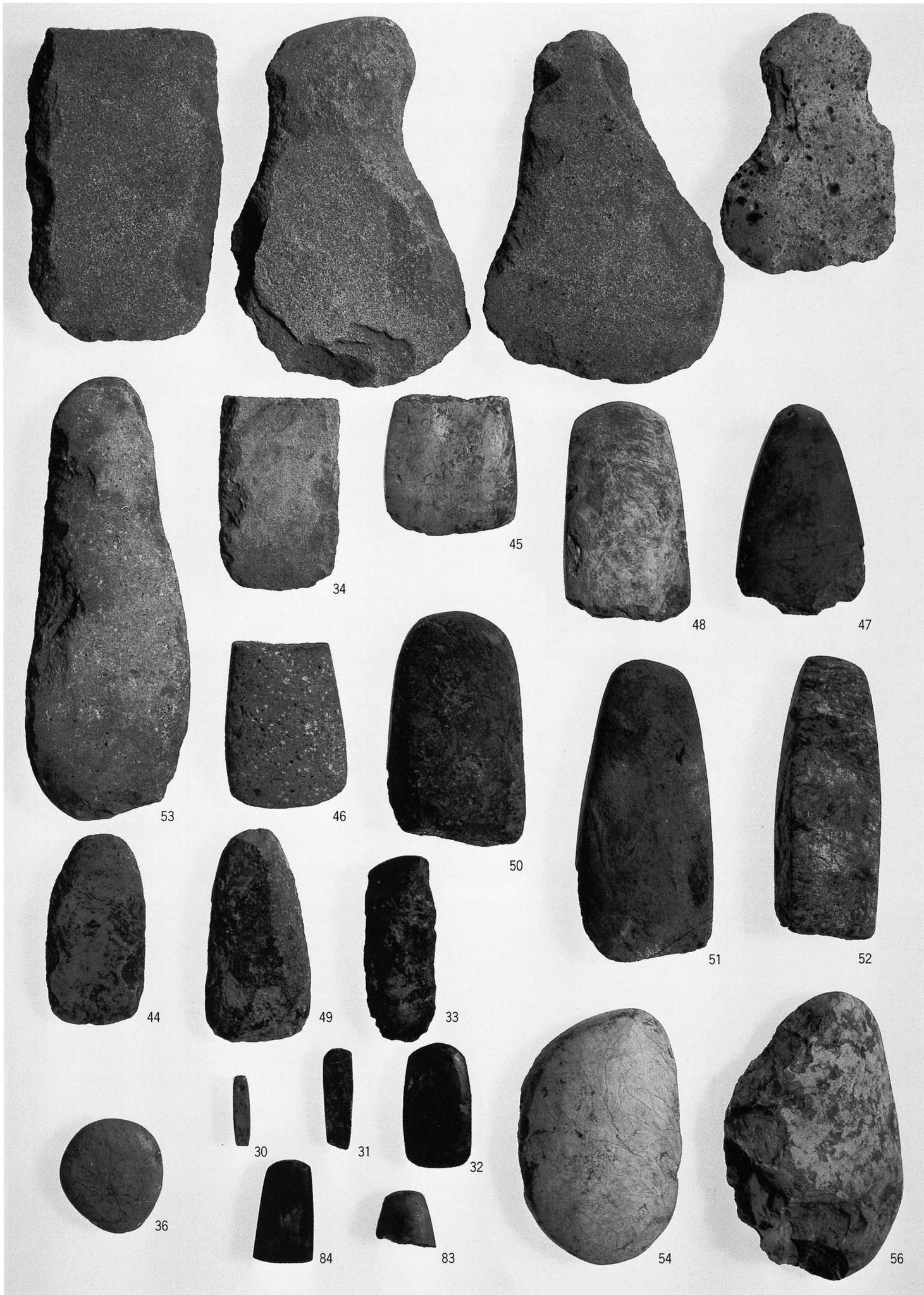
A Y - II ④南区 S K 17出土 浅鉢 (S = 1/2)



A Y - II ④南区 S K 24出土 浅鉢 (S = 1/2)



A Y - II ④南区 S K35出土 深鉢 (S=1/2)



A Y - II 全区出土 打製石斧・磨製石斧・他 (S=1/2)